
平凡な男の決闘物語

サフィール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平凡な男の決闘物語

【Nコード】

N0465M

【作者名】

サフィール

【あらすじ】

ごくごく普通のネタデツキと萌えカードが大好きな少年がGXの世界へ行きデュエルを楽しむ小説です

オリカを作る（あと使いこなす）頭も文才もありませんが暇つぶし程度に読んでください

作者はこれが初小説です、それを前提に温かく見守ってください

プロローグ（前書き）

閲覧ありがとうございます

なにげに実は初投稿なんですよ

みんなの小説読んでたら書きたくなっちゃって…

ただの自己満小説でオリカも文才もありませんがよろしくお願いします

プロローグ

なにも存在しない
ただ白い景色が延々と続いている世界に今一人の少年
神野あきらがいた

(なんなんだよこれ
どうして俺はこんなところにいるんだよ)

「意味わかんねえよ」

そう呟いた彼は自らの記憶を辿っていった

(そういえばたしか俺は下校中信号の所で車に轢かれそうになって
る女の子を助けようとして…)

「思い出したあああ！」

(あの車けっこうスピードでてたし轢かれたって事は…)

「俺は…死んだのか」

「やっと気づきおったのか」

あきらしかいないはずの空間に老人の声が響いた

「だれだ!？」

突然聞こえた声にあきらは驚きながらも声の主を探した

「いきなりだれだとは失礼な奴じゃの」

そう言いながらあきらを見ている老人がいた

彼は全身白い服をきて背景の色とかぶりわかりずらかった

(気が付くわけねえだろ
ややこしい服着やがって)

「それは失礼しました
いくつか聞きたい事があるのですがいいですか？」

相手は年上なので一応は敬語で話したあきらだった
心の中ではボロクソいつてはいるが

「ほう、話し方だけはしっかりしておるの」と顎に生えた長い髭を
弄りながら関心したように老人は言った

(偉そうにいいやがってこのジジイ)

「今おぬしは『偉そうにいいやがってこのジジイ』とそう心で思っ
ていたのう」

「どうしてそれが!?!」

「それとさっきわしの服をバカにしておったの」

「うわ!それもかよ」

(なにこいつプライバシーもなにもねえじゃねえか)

とあきらは今の自分の状況も忘れて心の中で老人にツッコミを入れた

「なぜ分かったかというのはじゃな、わしがお主たちでいう神と呼ばれる存在だからじゃよ」

(それだと色々と話しの都合があうな
今いる空間もこいつが作ったのか?)

「神? どうしてそんな方が俺の所に?」

「それはのう…」

と老人もとい神はあまり言いたくなさそうに言った

「もったいぶらずに教えてください」

「怒るなよ」

「怒りませんから早く教えてください」

その言葉を聞いて神は少し安心したような表情をしたあと

「実はのうわしのミスでまだまだ寿命のあるお主を死なせてしまっ
たからじゃ」

と彼にとってものすごい爆弾発言をした

「ちょっと待て!

意味が分からない！
その話し詳しく聞かせる！？」

今の神の発言に対しかなり驚いたようであきはかなり混乱していた
怒鳴るように神に言った

「実はのう…」

本来ならもつとお主は長生きするはずだったんじゃ
しかしなぜかお主はその寿命を残し死んでしまったのじゃ
しかもその原因はわしでも分からなくてのお

こんなことは初めてなんでわしも困っておるのじゃ」

「マジかよ… まあでもあんたでも原因が分かんないんじゃしょう
がないよな」

あきはあまり怒るわけでもなく諦めたように言った
そして

「その話と俺をここによんだのにはどう関係があるんだ」

と彼は神に聞いた

どうやら彼はそんな過去のことより今自分がいる不思議ゾーン（命
名あきら）が気になるようである

「実はのう」

本来ならまだ寿命を残しておったお主にチャンスをやろうと思って
のう」

「チャンス？

そこらの小説みたいにとリップとかか？」

そうは言ったがあきらは本心では異世界の存在を信じていないので
彼なりのジョークのつもりだったが

「その通りじゃ

お主を好きな世界に

しかも好きな能力も3つまでつけて送ってやる
さあどんな能力が欲しいかいつてみるがよい」

と完璧に彼の予想を上回る答えが返ってきた

「マジかよ!？」

だったらルールが俺がいた世界のルールの遊戯王GXの世界が
いい」

異世界の存在を信じていなかった割には早い回答であった

「能力は何がほしいのかの？ デステイニードローやチートドロー、
モンスターの実体化：何でもよいぞ」

なかなか遊戯王に詳しい神に対し少し疑問を抱いたあきらだった
がそれはどうでもいいのでスルーすることにした

「いらねえよ

そんなんあったらデュエルつまないだろ」

「本当にいいのかの？ オリジナルカードなんかも作れるんじゃないぞ？」

神としては一応お詫びのつもりなので能力を受けとって欲しいようだ

「だからいらねえよ

あといい忘れたけど俺が使ってたデッキを使ってるのか？」

「別によいがお主が神のカードを使っても特別な力はないぞ
それでもいいのかの？」

「デュエル楽しむのにオカルト能力はいらねえし あんな危険なデュエルはしたくない」
「どうやら彼としては自分のデッキがあれば問題は無いようである」

ただ問題はGXの世界に行くのにあきらのデッキにはシンクロを使うデッキがあるということだ

もともと原作をあまり見ていないあきらは全くそれに気付いてないが…

「まあいいじやろう」

それじゃあお主を異世界へ送るぞ」

「任せた」

そうあきらが一言言った瞬間強い光があきらを包み込み
そこであきらの意識はなくなった

プロローグ（後書き）

いやぁ小説書くのって疲れますね（当たり前だが）
でも楽しいです

今回はデュエルなしでしたが次話でデュエルするので楽しみに

第一話異世界初デュエル！アカデミア入試試験（前書き）

今回が主人公初デュエルです

ちなみに主人公が使うデッキの全てが作者のデッキをモチーフにしたデッキ、または読者様からのリクエストにしようと考えています

なのでどしどしリクエストくださいなるべく主人公に使わせます

第一話異世界初デュエル！アカデミア入試試験

「ここは…海馬ランドか？」

あきらは青眼の白竜を使いこなす某社長の建てたテーマパークにいた

「入学試験か？俺場所知らないぞ」

どうやら少しは原作を覚えているようである

ちなみに今の彼の服装は学ランに左腕にデュエルディスクをつけるという格好である

「すみません

ここからデュエルアカデミアの受験会場はどういけばいいですか？」

「ああそれならその建物を…」

道を教えてくれた人から受験までの時間が少ないことを聞いたあきらは全力疾走で会場に向かった

「すみませんまだ試験は受けれますか！？」

「まだ大丈夫だ！早く行きなさい！」

「ありがとうございます！」

会場受付に着いた彼は急いで受付の人にお礼をいい会場に入ってしまった

あきらが会場に入るとどうやらほとんどの試験は終わっていたようで

デュエルフィールドには一人の学生しかデュエルをしていなかった
「いけえ！フレ임・ウィングマン！スカイスクレイパーシユート
！！」

あきらはその声を聞いて

（十代の生デュエル見逃した…）

と悔しがっており試験に対し緊張した様子もなく全然余裕そうだった

『それでは受験番号72番の方デュエルフィールドに出てきて下さい』

（後は俺しかいないから72番って俺か…

十代よりは筆記いいんだな）

アナウンスが聞こえてからもやはり緊張の欠片もないようだ
しかし

（デッキの確認してねえ） 今更とても重大な事に気づいたようである

（やばいネタデッキだったらどうしよう）

「私が今回の試験官だ

よろしく」

「よろしくお願いします」

と諦めたようにあきらは挨拶をした

というより彼はネタデッキ使いなのでガチデッキはBFぐらいしかないのだが

「そのデュエルちょっと待つノ〜ネ」

と試験が始まるうとした時に独特の喋り方をしたおそらく試験官であるう人が急に割り込んできた

「そのドロップアウトボーイはワタクシが相手をするノ〜ネ」

（古代の機械苦手なんだよなあ…たのむ俺の試験官！あいつを止めてくれよ）

と彼は独特の喋り方をするおかつぱもとといクロノス教諭とデュエルにならないように心で念じていた

「しかし！」

「彼はこの試験に遅刻しているノ〜ネ

そのペナルティとしてワタクシが実技担当責任者としてデュエルするノ〜ネ」

「わ、分かりました

クロノス教諭がそこまでおっしゃるのでしたら…」

（おい！もうちょっと粘れよ！）

「分かればいいノ〜ネ」

（このデュエルでさっきのデュエルの汚名返上するノ〜ネ）

（こうなったらワンキルでもしてかっこいい所見せて観客席のオベリスクブルーの女子とお話を…）

とどちらもろくな理由ではないが

これから始まるデュエルに対しても気合が入っている

「というわけで私があなたの試験を担当するノ〜ネ」

「よろしくお願いします」

「デュエル！」

「私のターン！ドローニョ！」

(デュエルディスクが先攻後攻決めるのか
けっこう便利だな…)

ちなみにこの試験ではルールが通常と違い
ライフ4000ルールになっている
アカデミアでそうしているからというのが理由になっている

「手札からトロイホースを召喚するノ〜ネ さらに手札からマジックカード二重召喚を発動するノ〜ネ」

とクロノスはデュエルディスクから引いたカードをそのままディスクに出し
カードを発動させた

《トロイホース》

星4 / 地属性 / 獣族 / 攻1600 / 守1200

地属性モンスターを生け贄召喚する場合、

このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

《二重召喚》

このターン自分は通常召喚を2回まで行う事ができる。

(ソリッドビジョンってすげーな)

とあきらはこれからどんなモンスターが出てくるか
ある程度の予想は出来ていたので軽く現実逃避していた

「私は手札から古代の機械人形を生け贄召喚するノ〜ネ」

(やっぱりきたよ…)

《古代の機械巨人》アンティーク・ギアゴレム 星8 / 地属性 / 機械族 / 攻3000 / 守3000
このカードは特殊召喚できない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

このカードが攻撃する場合、

相手はダメージステップ終了時まで魔法・罫カードを発動できない。

「おいマジかよ」「あいつ負けたな」「さすがに古代の機械巨人を
だしたクロノス教諭が二回も負けることはないだろ」

などと会場中から声が聞こえてくる

(うぜえなこいつら…)

会場の声には彼は少しイラついているようだ

あきらは「デュエルは最後まで何があるか分からない」
と考えているので負けるに決まっているなどと決めつける決闘者が
嫌いなのだ

「カードを1枚セットしてターンエンドなノ〜ネ」

(伏せたカードはミラーフォースなノ〜ネ

これであるドロップアウトボーイがどんなモンスターを出そうと返

り討ちでスーノ)

遊戯王では説明は負けフラグと言われているのにそれを知らないク
ロノス心の中でそう呟いていた

《聖なるバリア・ミラーフォース》 通常罨(制限カード) 相
手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

クロノス

フィールド魔法

なし

場

- -
- -
- -

手札2枚

「俺のターンドロー！」

(この手札は…ワンキルできるな)

どうやら今回は運が良かったようである

自分の手札に満足した表情を見せるとあきらは手札からカードを発
動した

「俺は手札から速攻魔法サイクロンを発動！先生の伏せカードを破
壊する！」

《サイクロン》

速攻魔法

フィールド上の魔法・罨を一枚破壊する

「さらに手札から魔法カード未来融合・フューチャー・フュージョ

ンを発動！

俺はデッキからドラゴン族モンスターを5枚墓地に送りF・G・Dを2回目の自分のスタンバイフェイズ時に特殊召喚する！」

《未来融合・フューチャー・フュージョン》

永続魔法（制限カード）

自分のデッキから融合モンスターカードによって決められたモンスターを 墓地へ送り、融合デッキから融合モンスター1体を選択する。

発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に選択した融合モンスターを 自分フィールド上に特殊召喚する（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）。

《F・G・D》
ファイブ・ゴッツ・ドラゴン

融合・効果モンスター 星12/闇属性/ドラゴン族/攻5000
/守5000

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

ドラゴン族モンスター5体を融合素材として融合召喚する。

このカードは地・水・炎・風・闇属性モンスターとの戦闘によっては破壊されない。

（ダメージ計算は適用する）

「なんでドロップアウトボーイの貴方がF・G・Dなんてレアカードをもってるノ〜ネ!？」

（やけに驚いてるな

会場もなんさ騒然としてるし

そんなにこっちじゃレアカードなのか？

普通に友人からタダで貰った奴だか…)

驚くに決まっている

攻撃力5000を超えるモンスターなど数えるほどしか存在せず
とても価値があるからだ

もともと彼はあのカードを初心者頃に貰ったのであまり価値を分
かっていないようだが

「さらに俺は手札からフィールド魔法死皇帝の陵墓を発動！」

《死皇帝の陵墓》フィールド魔法

お互いのプレイヤーは、生け贄召喚に必要なモンスターの数×10
00ライフポイントを払う事で、生け贄モンスター無しでそのモン
スターを通常召喚する事ができる。

「俺はライフを1000支払い死皇帝の陵墓の効果を発動！」

神竜―エクセリオンを生け贄無しで召喚！」

《神竜 - エクセリオン》効果モンスター

星5 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻1500 / 守 900

このカードの召喚時に自分の墓地に存在する「神竜 - エクセリオン」
1体につき、以下の効果を1つ得る。

ただし同じ効果を重複して得る事ができない。

このカードの攻撃力は1000ポイントアップする。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、もう
一度だけ続けて攻撃を行う事ができる。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、
破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「俺は二番目と三番目の効果を選択する！」

「なるほど、さっきの未来融合ーフューチャー・フュージョンの時にエクセリオンを墓地に送ったのか」

と会場から關心したように言う声が聞こえた

余談だが今解説をしたのは成績トップの三沢大地という人物である

「やはり所詮はドロップアウトボーイなノ〜ネ、

どうせ効果を使うなら攻撃力をあげればよかったノ〜ネ

まあなにをしてもドロップアウトボーイが使う雑魚カードに私のアンテイク・ギアゴレームは倒せるはずがないノ〜ネ」

(今のはイラツと来たぞ)

普段はネタデッキを使う彼だが「デュエルに勝つにはデッキへの愛だ」と普段から言うほどデッキを信頼しており

自分のデッキやカードがバカにされるのは許せないようだ

「俺のカードを侮辱したことを後悔させてあげますよ

俺は手札から装備魔法守護神の矛をエクセリオンに装備！」

《守護神ごうごしんの矛こ装備魔法じぶひまほう

装備モンスターの攻撃力は、墓地に存在する装備モンスターと同名カードの数×900ポイントアップする。

「墓地に存在するエクセリオンは2枚！

よってエクセリオンの攻撃力を1800ポイントアップ！」

エクセリオン

ATK

1500+1800=3300

「これでアンテイク・ギアゴレームの攻撃力を上回りましたね
バトルフェイズ！」

神竜「エクセリオンでアンテイク・ギアゴレームに攻撃！」

エクセリオンの口から放たれた白く光輝く光線がクロノスに襲いか
かった

33000 - 30000 = 3000

クロノス

LP4000 - 3000 = 3700

「さらにエクセリオンの効果発動！先生にアンテイク・ギアゴレ
ームの攻撃力分のダメージを与えます！」

さらにエクセリオンはクロノスに対し体を叩きつけて攻撃を行なう
なかなか痛そうソリッドビジョンで立体映像であることを忘れてしまっ
るほど迫力がある

クロノス

LP3700 - 30000 = 700

「エクセリオンは自身の効果でもう一度だけ続けて攻撃できます
エクセリオンで先生にダイレクトアタック」

そしてエクセリオンは止めと言わんばかりに先ほどよりも強力な光
線を放った

クロノス

LP700 - 33000 = 0

「この私が負けるなんぐてあり得ないぐノ！」
自らの実力を信じていたクロノスは自分が二度も生徒に、それも遅
刻してくるような生徒に負けた事に対し大きなショックを受けていた

「デュエルであり得ないことなんてないと思いますけど…」

そんなクロノスの気持ちも知らずに簡単に事実をいつてしまったあ
きらだった

とにもかくにもこうしてあきらの異世界初デュエルはこうして無事
に勝利で飾ることができたのであった

第一話異世界初デュエル！アカデミア入試試験（後書き）

今回のデュエルは自分の弟のクロノスデッキとのデュエルを参考に
して構成しました

もしなにか間違いがあったら感想をお願いしますm（|）m

第二話アカデミアへの船旅（前書き）

アニメを見たのが大分前なので十代と翔の喋りかたがおかしいかも…

なのでなにかおかしい点ありましたら感想までお願いしますm（

ー）m

第二話アカデミアへの船旅

青い海に青い空そして白い雲

そんな心地よい天気のほかデュエルアカデミアに向かう船の中にあきらはいた

「いい天気だなあ」

とのんきなことをいうあきは燃え上がるような赤い色の制服に身に纏っていた

(十代や翔と一緒によかった)

などと心の中で呟いたあきはこれからどんなデッキを使うかベルトに装備されたデッキケースからデッキを取り出し改めて中身を確認していた
しかしその時

「待つてよアニキ〜！」

「おい、お前って俺の後に試験受けてたやつだよな？ 凄かったなあお前のデュエル！」

と二人分の声がしたのでそちらを見ると背の高い少年と背の低い少年がいた

そのうちの背の高い方はあきらに話しかけたようだった

「わりい、自分の前の試験はあまりみてないんだ 遅刻ギリギリだったし

俺は神野あきらっていうんだ
名前を覚えてもらってもいいかな？」

「オレは遊戯十代！それでこっちが」

「丸藤翔っていうんだ、よろしく」

どうやら大きい方が十代で小さい方が翔というらしい

(アニメで見るのと実際見るのじゃ違うな…)

「なああきらデュエルしようぜ！試験であきらのデュエル見てたらやりたくなっただ！なあいいだろ？」

(使うデッキも決まったしちょうどいいかな)

「別にいいよ」「本当か！？なら楽しいデュエルにしようぜ！」「もちろんだ！」

こうして二人がデュエルをすることが決まり握手をしたところで

「二人とも頑張ってね」

と翔が声援をくれた

そしてその翔の声援がデュエル開始の合図になった

「デュエル！」

「オレのターン！ドロー！」

十代はドロートしたカードを確認すると手札からカードを発動させた

「俺は手札から魔法カード融合を発動！」

《融合》

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「手札のフェザーマンとバーストレディを融合し、E・HEROフレーム・ウィングマンを融合召喚！」

《フレーム・ウィングマン》融合・効果モンスター 星6/風属性/戦士族/攻2100/守1200

「E・HERO フェザーマン」+「E・HERO バーストレディ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「リバースカードを一枚セットしターンエンド！」

十代LP4000

フィールド魔法

無し

- - - -
- - - -

手札二枚

「俺のターンドロート！」

あきらはそういうとディスクからカードを一枚引き抜き手札からカードをディスクにセットした

「俺はモンスターを一枚セットしリバーズカードを二枚セットしてターンエンド！」

あきらLP4000

フィールド魔法

無し

- - -

- - -

手札三枚

「じゃあいくぜ！オレのターンドロ！」

十代はデッキから引いたカードを確認すると笑顔になり引いたカードをそのまま発動させた

「オレは手札から強欲な壺を発動！」

《強欲な壺》

通常魔法（禁止カード） 自分のデッキからカードを2枚ドロする。（禁止カードじゃねえか…）

あきらのいた世界では強欲な壺は禁止カードになっていたため十代が使った事に対しあきらは焦せていた

「オレはデッキからカードを二枚ドロする！」

そういうと十代はデッキから二枚のカードを引き抜いた

「バトル！フレイム・ウィングマンで伏せモンスターにアタック！
フレイム・シュート！」

フレイム・ウィングマンはあきらのモンスターに対し炎で攻撃したが
その攻撃は異空間へと吸い込まれてあきらの場のモンスターに届か
なかった

「リバースカードオープン！攻撃の無力化を発動！」

《攻撃の無力化》

カウンター罫

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手モンス
ター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「うまい！アニキの攻撃を上手くかわした！」

「どうだ十代！」

「なかなかやるなあきら！俺はリバースカードを一枚セットしてタ
ーンエンド！」

十代LP4000

フィールド魔法

無し

- - -
- - -

手札三枚

「オレのターンドロロー！」

デッキから引いたカードを確認するとあまりよいカードではなかったのか少しあきらの表情が悪くなっていた

(まあなるようになるか)

そうあきは心で呟くと今度は守りから攻めに入った

「俺は風霊使いウインを反転召喚！」

《風霊使いウイン》

効果モンスター

星3 / 風属性 / 魔法使い族 / 攻 500 / 守 1500

リバース：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

相手フィールド上の風属性モンスター1体のコントロールを得る。

あきらがモンスターを表にするととてもかわいい少女がソリッドビジョンで現れた

「「かわいいな」」

と思わずハモってしまった翔とあきはしばらくウインにメロメロだった

「かわいいのは分かったから早くしてくれよ」
待ちくたびれたぜ」

「すまん忘れてた、とりあえずウインの効果でフレイム・ウィングマンのコントロールを俺に移すぞ」

「げーマジかよー！」

「いくぜフレイム・ウィングマンで十代に攻撃！」

さっきまで十代のモンスターだったフレイム・ウィングマンが今度は十代に襲いかかった

十代LP

4000 - 2100 = 1900

「俺はターン終了だ」

あきらLP4000

フィールド魔法

無し

- -

- -

手札4枚

「オレのターンドロー！」

十代は目当てのカードを引き当てたことを確認しそのままカードを発動させた

「オレは手札から二枚目の融合を発動！」

「このタイミングで融合を引き当てたのか!？」

「手札のスパークマンとクレイマンを融合しE・HEROサンダー
ジャイアントを融合召喚！」

《E・HEROサンダージャイアント》

融合・効果モンスター

星6 / 光属性 / 戦士族 / 攻2400 / 守1500

「E・HERO スパークマン」+「E・HERO クレイマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

自分の手札を1枚捨てる事で、フィールド上に表側表示で存在する元々の攻撃力がこのカードの攻撃力よりも低いモンスター1体を選択して破壊する。

この効果は1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに使用する事ができる。

「バトル！サンダージャイアントで風霊使いウインに攻撃！ボルテック・サンダー！」

十代が攻撃宣言をすると同時にサンダージャイアントは雷でウインに攻撃をしかけた

「ウインはこのデッキのアイドルだ！やらせはしないぞ十代！攻撃宣言時にガリトラップ・ピクシーの輪-を発動！」

《ガリトラップ・ピクシーの輪-》

永続罠

自分フィールド上にモンスターが表側攻撃表示で2体以上存在する場合、相手は攻撃力の一番低いモンスターを攻撃対象に選択する事ができない。

「ならメインフェイズ2にサンダージャイアントの特殊効果を発動！手札一枚をコストにフィールド上のモンスターを破壊する！オレはウインを破壊するぜ、いけえ！サンダージャイアント、ヴェイパー・スパーク！」

サンダージャイアントの雷によりウインは破壊された

破壊される時にごめんなさいとでも言いたそうな切ない表情をして墓地に送られていった

「ウインが……」

またもやハモった翔とあきらだった

なおウインの効果によりコントロールがあきらに移ったフレイム・ウイングマンは十代の元に戻っていった

「なんかごめんなあきら……、ターンエンドだ！」

がっかりしているあきらを見た十代は思わず謝ってしまっていた

十代LP1900

フィールド魔法

無し

-
-
-

「ウインの仇はとってやる、俺のターンドロロー！」

自分の引いたカードを確認したあきらは手札からカードをディスクに叩きつけるように置いた

「手札からマジカル・コンダクターを通常召喚！」

《マジカル・コンダクター》効果モンスター

星4/地属性/魔法使い族/攻1700/守1400

自分または相手が魔法カードを発動する度に、このカードに魔力カウンターを2つ置く。

このカードに乗っている魔力カウンターを任意の個数取り除く事で、

取り除いた数と同じレベルの魔法使い族モンスター1体を、手札または自分の墓地から特殊召喚する。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「さらに俺は手札から地割れを発動！」

《地割れ》

通常魔法

相手フィールド上に表側表示で存在する 攻撃力が一番低いモンスター1体を破壊する。

あきらがカードを発動させるとフレイム・ウイングマンの真下の地面が割れそのまま地面に飲み込まれてしまった

「まだメインフェイズは終わってないぜ！俺はマジカル・コンダクターの効果を発動！」

乗っている魔力カウンターはさっきの地割れので二個だ！俺は魔力カウンターを全てとりのぞき黒魔導師クランを手札から特殊召喚！」

《黒魔導師クラン》

効果モンスター

星2 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻1200 / 守 0

自分のスタンバイフェイズ時、相手フィールド上に存在するモンスターの数×300ポイントダメージを相手ライフに与える。

「凄い…アニキのフレイム・ウイングマンを除去した上にさらにモンスターを特殊召喚するなんて…」

と翔は感心と驚きが入り交じったように言った

「今からどんな戦略で来るのか楽しみだ！あきらの本気を見せてくれ！」

と十代はあきらがどうやって自分を倒そうとしてくるのかそしてそれをどうやって打ち破るうかととてもワクワクしていた

「さらに俺は装備魔法王女の試練をクランに装備させる！」

《王女の試練》

装備魔法

「白魔導士ピケル」「黒魔導師クラン」にのみ装備可能。装備モンスターは攻撃力は800ポイントアップする。装備モンスターがレベル5以上のモンスターを戦闘によって破壊したターン、装備モンスターとこのカードを生け贄に捧げる事で、「白魔導士ピケル」は「魔法の国の王女・ピケル」を、「黒魔導師クラン」は「魔法の国の王女・クラン」を手札またはデッキから1体特殊召喚する。

クラン

攻撃力

1200+800=2000

「オレは手札から二重召喚を発動！マジカル・コンダクターを生け贄に捧げて手札からブリザード・プリンスを通常召喚！《ブリザード・プリンス》効果モンスター」

星8/水属性/魔法使い族/攻2800/守2100

このカードは魔法使い族モンスター1体を生け贄にして表側攻撃表示で生け贄召喚する事ができる。このカードが召喚に成功したターン、相手は魔法・畏カードを発動する事ができない。

「レベル8のモンスターを生け贄一体で!？」

「凄いだろ翔!こいつは魔法使い族モンスター生け贄にした場合生け贄一体で表側攻撃表示で生け贄召喚できるんだ!

さあいくぞ十代!ブリザード・プリンセスでサンダージャイアントにアタック!」

2800 - 2400 = 400

十代LP

1900 - 400 = 1500

「ならオレはリバーズカードオープンブリザード・プリンセスの効果で魔法・罫カードはこのターンが終わるまで使えないぞ!げ!マジかよ…」

「これで終わりだな、俺は黒魔導師クランでダイレクトアタック!」

十代LP

1500 - 2000 = 0

「負けちゃったけど楽しいデュエルだったぜ!またデュエルしような」

「ああもちろん!アカデミアに着いたらまたデュエルしような」

デュエルが終わった二人は固い握手をしてこのデュエルで二人が友達になった事を実感していた
すると

「アニキにあきら君島が見えたっすよ」

と翔がアカデミアのある島が目に見える所まで来たことを二人に知らせた

「早く見に行こうぜ！あきらも早く来いよ！」

「あ！ちょっと待て十代俺を置いてくな！」

走って翔の元に行く十代を慌ててあきらが追って行った

第二話アカデミアへの船旅（後書き）

多分読者の皆さんは気づいていると思いますが
今回の主人公のデッキキターマはリクエストにもありました「萌え」
です

しかし作者のデッキ構築とデュエル構成が悪いため
マジシャンズヴァルキリアなど他にもたくさん萌えるカードがある
のにあまり出せませんでした（泣）

こんな作者ですが頑張って最低

週に一回は更新できるよう頑張るので応援お願いしますm（――）m

リクエストもガンガン募集中です！

第三話 VS 万丈目の取り巻きA！（前書き）

閲覧ありがとうございますm（――）m

もしかしたらしゃべり方がアニメと違う所があるかもしれないですがよろしく願います

第三話VS万丈目の取り巻きA！

あのと船を降りたあきら達は校長の有難い話を聞いていた

「ZZZZ・・・」

訂正、十代とあきらだけは寝ていた

「~~~~楽しく勉強とデュエルをしてください」

校長の話しも終わり少し暇になったあきら達三人が話をしていると

「やあ君たち、自分の寮には行かないのかい？」

と黄色い制服を身に纏った少年があきら達に話しかけてきた

「初めましてだよな？俺は神野あきらだ、名前教えて貰ってもいいか？」

「僕は三沢大地だ、あきら君の試験は見させてもらったよ

あんなにいいデュエルをした君や十代君がどうしてもオシリスレッドなのか不思議だよ」

「どうして俺たちがオシリスレッドだって分かったんだ？」

二人の会話を聞いた十代は三沢が自分達がどうしてもレッドだと知っているのか疑問に思いそう聞いた

「制服で分かるようになってるんだ、僕の制服は黄色だから僕はラ
ーイエローというわけだ」

「制服にはそんな意味があったんすか…」

「分かりやすくていいよなこの制服」

と翔とあきは感心したようにいった

「それじゃあ僕はそろそろ自分の寮に戻るとするよ」

ライイエローの寮に向かって歩きだそうとする三沢にあきらが話しかける

「月に一度ある試験で面白いの見せてあげるから楽しみにしてろよ」

それに対して「楽しみにしてるよ」と三沢は一言返すと自分の寮に向かった

「なあ面白いものつてなんだ？」

「僕も気になる！教えてあきら君？」

あきらが三沢に言った面白いものというのが気になる十代と翔はあきらにそう質問した

「次にデュエルする時に見せるよ」

と十代と翔にあきらが答えると

「じゃあ今すぐデュエルしようぜー」

と十代はデュエルディスクを起動させようとするが

「寮に行くのが先だろ、一番乗りは貰った!」

と言ってあきはレッド寮のある方向に走っていった

「あ!待ってくれよあきら!」

「アニキ、あきら君待ってよ」

と言って十代と翔はあきらを追いかけていった

「ここがレッド寮なのか…」

「な、なんすか、これ!」

とレッド寮のボロボロさにあきは言葉もあまりでず

翔はショックを受けていた

「眺めもいいし風情があつて良いところだな!」

十代だけは二人と違い喜んでいた

「とりあえず自分達の部屋に行こうか」

とあきらが言ったことで一先ずここは解散ということになったが

(十代と翔一緒の部屋じゃねえか…)

十代と翔が同じ部屋に入ったのを見たあきは

自分一人だけが別の部屋だったことへこみつつ自分の部屋に入っ

ていった

「なかなかいい部屋だな、しかも俺一人だけだし」

あきらは部屋を見渡すとそう言った

「しかしテレビはないのか…」

部屋には勉強机とベッドそして複数のカードファイル、そして複数のダンボールがあるだけで他には特に何も無かった

「ん？なんでダンボール？」

と疑問に思ったあきらはとりあえず「自分の部屋にあるやつだから大丈夫」ということにしてかってにダンボールを開けた

「なんでこんなに…」

ダンボールを開けたあきらの目に映ったのは大量のカードだった

（一体誰が…

ん？これは！）

あきらはダンボールの近くに手紙を見つけるとそれを読み上げた

「え〜つとなになに

『ここにある大量のカードはわしからお主への最後のプレゼントじや、全てのカードを三枚ずつ用意したから自由に使うとよい

どんな危険な目にあっても頑張るんじゃぞb y 神様』ってあいつからかよ…」

あきらかに危険な事があると云ってるような手紙だったが「どうせ闇のデュエルだろ」とあまり気にしない事にしたあきらだった

「おゝい！あきら、一緒に散歩にでも行こうぜ〜！」

部屋の片付け（大半はカードの整理）が終わった所で寮の外から十代があきらを呼んだ

「今いく！」

そう部屋から返事するとあきは先ほど組んだデッキをデッキケースに入れた

「あきら君早く〜！」

と翔が急かすのを

「準備終わったから今行くよ〜！」

と部屋から返事をするにあきは戸締まりをしっかり確認し十代たちの元に走っていった

「はあ〜」

「どうかしたのか翔？」

ため息をつく翔を心配してあきらがそう聞くと

「実はさっき同じ部屋の隼人君からオシリスレッドは落ちこぼれ集団だって言われたっすよ」

と翔がため息をついた理由を教えてくれた

「レッドからだってブルーに上げれるだろ、大丈夫だって」

話を聞いたあきらが翔を励ましていると

「なああきら、翔どっかでデュエルしてる奴がいるぜ！早く見に行こうぜ！」

急に十代はそう言い走って学校の方に走っていった

「こっちのほうだ！」

自信をもってそう言いながら走っている十代にあきらが

「なんで分かるんだ？」

と質問すると

「デュエルのニオイがする！」

と完璧にあきらの予想外の質問が返ってきた

「そんなのあるんすかアニキ！？」

翔も十代が言ったことに対し思わずツツコミを入れている

(今更だけど翔ってツッコミキャラなんだな)

そんなくだらないことを考えているとアカデミアのデュエル場に辿り着いていた

「スゲー！アカデミアにはこんなのがあるのか」

「これって最新の設備のデュエルフィールドだよ！さすがデュエルアカデミアだなあ」

翔と十代はとても興奮していたその時

「ここは、オシリスレッドのようなドロップアウトが来る所じゃない早く自分の寮に帰るんだな」

青い制服

つまりオベリスクブルーの制服を身に纏った男があきらたちにそう言ってきた

「ここは学校の設備だろ？俺たちはダメなのか？」

ブルー寮の人が言ったことを疑問に思ったあきらがそう尋ねるともう一人いたブルーの人が

「上を見てみるんだな」

「上を？」

そうハモってあきら達三人が上を見てみるとオベリスクの紋章がそこにあった

(オベリスクかっこいいなあ使いたいけど使おうと説明めんどいしな

あ
)

オベリスクの紋章をみたあきらの思考が全然違う所にいつていた
その時

「じゃあオレとデュエルしないか？オレが勝つたらここを自由に使
わせてくれよ」

と十代がブルーの人にデュエルを申し込んでいた

「おまえ！どこかで見たことあると思つたら！」

「万丈目さんこいつらクロノス教諭に勝つたやつらですよ」

ブルーの男子に万丈目と呼ばれた男があきら達に話しかけてた

「たしか遊戯十代と神野あきらだったな、マグレだろうがクロノス
教諭に勝つたことは評価してやる」

万丈目がそう言った事に対し

「実力だ！」

と十代が真面目に答えたのに対し

「デッキを愛する心が俺の方が上だっただけさ」
とあきは聞いている人からしたらふざけて言った（あき拉的には

本気)

「ならその実力ここで見せてもらおうか」

万丈目はあきらを華麗にスルーすると十代にそう言ったその時

「あなたたちなにをしてるの？」

と女の人の声がした

「世間知らずな彼らに少々学園の厳しさを教えてあげようと思ってね」

「そろそろ寮の歓迎会が始まるわよ、早く行った方がいいわよ」

「行くぞお前たち」

万丈目がそういうと万丈目の後ろをブルーの男子二人(以後取り巻きとする)は着いていった

「万丈目の挑発には乗らない方がいいわよ、あいつらろくでもないんだから」

とブルーの女の子があきらたちに警告してくれた

「わざわざそんなこと言ってくれるなんて、もしかして俺に一目ぼれか？」

「あり得ないっすよアニキ……」

「あり得ないな」

とあきらと翔は冷静に十代に言っている

「なんだよ二人して〜！」

それを見ていたブルーの女の子は楽しそうに笑いながら

「ふふつ。面白いのねあなたたち、それよりあなたたちの所でも歓迎会があるはずよ、早く戻った方がいいんじゃないかしら」

と歓迎会の事を教えてくれた

「そうだった忘れてた！早く戻ろうぜ！」

と言って十代はレッド寮の方向に走っていった

「待ってよアニキ〜！」

「あ！待て十代！」

翔とあきらも慌てて十代の後を追うが決闘場を出るときにあきらは走りながらブルーの女の子に

「さっきはありがとう！俺あきらって言うんだ、君は？」

と名前を聞いた

「私は天上院明日香よ、また今度機会があったらお話ししましょう」

「わかった！またな！」

と明日香に言い残すとあきらは急いで十代たちを追いかけていった

「ふー、食った食った！すげーうまかったよなあきらー！」

「たしかに、なんであんなに美味しいんだろうな？」

あのあと歓迎会を終えたあきは十代たちの部屋でゆっくり話しをしていた

「じゃあまた明日な、おやすみ十代、翔」

「おう！また明日な」

「おやすみあきら君」

たくさん話しをしていたら眠くなったあきは少し早かったが今日は寝ることにして自分の部屋に戻っていった

「さて寝るか」

そう呟いたあきはベッドにダイブしもう少しで深い眠りに入れる所で

PPP!PPP!

と入学した時にももらったPDAが鳴った

「もう少しで寝れたのに…」

と寝るのを邪魔されるのが嫌いなあきは不機嫌な様子でメールを

開いた

『やあ、ドロップアウトボーイズ。午前零時デュエルフィールドで待っている、互いのベストカードをかけたアンティルールでデュエルだ勇気があるんだったら来るんだな。』

という内容で送り主は万丈目だった

(万丈目ぶつつぶす)

眠りを邪魔されたあきはそう心に誓い決闘場に向かった

あきのベルトには一つだけしかデッキケースが装着されていないかった

決闘場に向かう途中になぜか十代と翔がいた

「お前も万丈目に呼ばれたのか？」

「お前もってことはあきらも万丈目に呼ばれたのか？」

「そんなところだ」

と十代とあきらが話していると

「やっぱり帰った方がいいっすよー、明日香さんもあいつの挑発に乗らない方がいいって言ってたし」

「なに言ってんだよ翔、デュエルができるんだぜ行くに決まってるだろっ」

と十代は帰る気はさらさらないようだ

「その通りだぞ翔、それにあいつは俺を怒らせた」

とあきらが言ったのを疑問に思った翔は

「何かされたんすか？」

とあきらに聞くと

「あいつは俺の眠りをあんなくならない理由で妨げた」

といつもとは明らかにオーラが違うあきらが言った

(あきら君を下手に起こさないようにしよう)

その時翔はこう心に誓った

そうこうしている内にあきら達は決闘場に着いていた
中に入ると万丈目と取り巻きの二人がいた

「よく来たな遊戯十代、神野あきら」

「デュエルと聞いちゃこない理由はないぜ」

と万丈目に対し十代が言葉を返した

「神野あきら、お前は俺様が相手するまでもない、お前の相手はあ
いつだ」

万丈目が指差す先には万丈目の取り巻きAがいた
そして万丈目と十代はデュエルを開始していた

「今眠たくてイライラしてんだ

本当は万丈目一人をぶっ飛ばそうと思ってたけど取り巻きのお前も
同罪だ！早くディスクを構えろ！」

「生意気なドロップアウトが！すぐに捻り潰してやるよ」

「デュエル！」

「先攻は俺だ！ドロー！」

そついうと取り巻きAはカードをデッキから一枚抜き出し
思い出したようにこう言った

「いい忘れてたがこのデュエルのアンティはベストカードじゃない
お互いのデッキがアンティだ、デッキを失いたくなかったらせいぜ
い頑張るんだな」

そう言った取り巻きAに対しあきらは

「早く進めろよびびってんのか」

と挑発で返した

「ドロップアウトが強がりやがって！俺は手札からチェミナイ・エルフを召喚！」

《チェミナイ・エルフ》

通常モンスター

星4 / 地属性 / 魔法使い族 / 攻1900 / 守 900

交互に攻撃を仕掛けてくる、エルフの双子姉妹。

「さらに手札から装備魔法デーモンの斧をチェミナイ・エルフに装備！」

《デーモンの斧》

装備魔法

装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分フィールド上に存在するモンスター1体を 生け贄にする事でこのカードをデッキの一番上に戻す。

チェミナイ・エルフ

攻撃力

1900 + 1000 = 2900

「落ちこぼれのオシリスレッドじゃ俺のカードに勝てないだろ俺はターンエンドだ！」

取り巻きALP4000

フィールド魔法

無し

-
-
-

- - -
手札4枚

「俺のターンドロ―」

取り巻きAの言った事はスルーしてあきはさっさとカードをドロ―した

「俺はモンスターを一枚セットし、リバーズカードを二枚セットしてターンエンドだ」

あきらLP4000

フィールド魔法

無し

- - -
手札三枚

「守るだけか、所詮はオシリスレッドだな！オレのターンドロ―！」

と取り巻きAは三沢が相手したという

守備デッキをつかう試験官を全否定する発言をしてカードをドロ―した

「オシリスレッドの伏せカードなんて大したことはない、チェミナイ・エルフで伏せモンスターに攻撃だ」

「伏せてたのはクリッターだ、破壊はされるがクリッターの効果を発動させる」

《クリッター》

効果モンスター（制限カード）

星3 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1000 / 守600

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下のモンスター1体を手札に加える。

「俺はデッキからカオスエンドマスターを手札に加える」

（カオスエンドマスター？聞いたことないカードだな）

取り巻きAはそう思ったがどうせ大した事はないだろうとデュエルを続行させた

「俺は永続魔法凡骨の意地を発動しカードを一枚セットしてターンエンドだ！」

《凡骨の意地》

永続魔法

ドローフェイズにドローしたカードが通常モンスターだった場合、そのカードを相手に見せる事で、

自分はカードをもう1枚ドローする事ができる。

取り巻きALP4000

フィールド魔法

無し

- -

- -

手札3枚

「俺のターンドロー！」

あきららはドロ―したカードを確認すると一気に攻めに入った

「手札からレベル3チューナーカオスエンドマスターを召喚！」

《カオスエンドマスター》

チューナー（効果モンスター）

星3 / 光属性 / 戦士族 / 攻1500 / 守1000

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキからレベル5以上で攻撃力1600以下のモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「レベルを言っでどういう意味があるんだ？」とバカにしたような言い方で取り巻きAはあきららに聞いた

「今から分かるさ、俺はカオスエンドマスターでチェミナイ・エルフに攻撃！」

「ヤケになったか！チェミナイ・エルフの方が攻撃力は上だ！」

「攻撃宣言時にサイクロンを発動してデーモンの斧を破壊だ！」

フィールドに竜巻がおりチェミナイ・エルフが装備した斧を破壊しようとしたが

「リバースカードオープン非常食！デーモンの斧を墓地に送る！」

《非常食》

速攻魔法

このカード以外の自分フィールド上に存在する 魔法・罫カードを

任意の枚数墓地へ送って発動する。墓地へ送ったカード1枚につき、自分は1000ライフポイント回復する

装備されていたデーモンの斧は非常食へと変化し取り巻きAを回復した

取り巻きA

LP 4000 + 1000 = 5000

チェミナイ・エルフ

攻撃力

2900 - 1000 = 1900

「たかがオシリスレッドのやることなんて予想がついてんだよ！しかもまだチェミナイ・エルフの方が上だ！」

「まだまだ！ダメージステップに手札から突進を発動してカオスエンドマスターの攻撃力を上昇させる！」

《突進》速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで700ポイントアップする

「なんだと!？」

カオスエンドマスター

攻撃力

1500 + 700 = 2300

2300 - 1900 = 400

取り巻きA

LP5000 - 4000 = 4600

「カオスエンドマスターの効果を発動！デッキから神竜―エクセリオンを特殊召喚する！」

「やはり試験の時のデッキか！」

と取り巻きAが言ったのに対し

「いや、これは試験のデッキのパワーアップ版だ！」

実はあきらは神から貰ったカードを使いエクセリオンデッキをパワーアップさせていたのだ（試験の時はチューナーが入ってなかった）
「まだ俺はエクセリオンでは攻撃していない！
俺はエクセリオンでダイレクトアタック！」

取り巻きA

LP4600 - 1500 = 3100

「たかがオシリスレッドがここまでやるとはな…！」

と取り巻きAは少し悔しそうにそう言ったがまだまだ余裕といった表情だった

「ちなみに俺のバトルフェイズはまだ終わってないぜ、リバーサイドオープン緊急同調！」

《緊急同調》

通常罾

このカードはバトルフェイズ中のみ発動する事ができる。 シンクロモンスター1体をシンクロ召喚する。

「な…なんだそのカードは!?!」

「見てれば分かる、レベル3カオスエンドマスターをレベル5神竜1エクセリオンにチューニング!王者の鼓動、今ここに列を成す!天地鳴動の力を見るがいい!シンクロ召喚!我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン!」

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星8/闇属性/ドラゴン族/攻3000/守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、

ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する。このカードが自分のエンドフェイズ時に表側表示で存在する場合、このターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する。

「なんだ!?!そんな特殊な召喚条件を持つモンスター聞いたことないぞ!?!」

「メインフェイズに自分フィールド上のチューナーモンスターとチ

コーナー以外のモンスターを墓地に送って融合デッキから墓地に送ったモンスターのレベルの合計と同じレベルのモンスターを特殊召喚する、それがシンクロ召喚だ！緊急同調はそれをバトルフェイズ中に行えるようにするカードなんだよ」

「だからあの時レベルを言っていたのか…」
と取り巻きAは数分前あきらがモンスターのレベルを言ってから召喚していたのを思い出していた

「さあ行くぞ！レッド・デーモンズ・ドラゴンでダイレクトアタック！アブソリュート・パワーフォー스！」

取り巻きA

LP3100 - 3000 = 100

「俺はターンエンドだ」

あきらLP4000

フィールド魔法

無し

- -

- -

手札2枚

シンクロ召喚という未知の召喚方法に取り巻きAはとても焦っていた
もしかしたら自分は負けるのではないかと

(だめだだめだ、勝つことを考えないと)

取り巻きAのデッキはアカデミアに入ってから

取り巻きAが今までずっと大事にしてきたデッキなので思い入れが

あり奪われる訳にはいかないのだ

(オシリスレッドと舐めていたがこれから本気でいく！)

「俺のターンドロワー！」

取り巻きAはドロワーしたカードを確認するとそれをあきらみに見せた

「凡骨の意地の効果発動だ！ドロワーしたのはジエネティックワールフ！追加ドロワーだ！」

《ジエネティック・ワールフ》通常モンスター

星4 / 地属性 / 獣戦士族 / 攻2000 / 守100

遺伝子操作により強化された人狼。本来の優しき心は完全に破壊され、闘う事でしか生きる事ができない体になってしまった。その破壊力は計り知れない。

「ドロワーしたのはサイバネティック・ワイバーンだ！追加ドロワー！」

《サイバティック・ワイバーン》通常モンスター 星5 / 風属性 /

機械族 / 攻2500 / 守1600 メカで強化された翼竜。ドラゴンにやられ死にかけた所を、飼い主にサイボーグ化された。

「まだまだあ！ドロワーしたのはチェミナイ・エルフ！追加ドロワー！ドロワーしたのはジエネティック・ワールフ！追加ドロワー！ドロワーしたのはコスモクイーン！」

《コスモクイーン》

通常モンスター 星8 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻2900 / 守24

50

宇宙に存在する、全ての星を統治しているという女王。

「追加ドロ―！これで終わりだな」

「手札9枚とか嘘だろ…」

あきらは取り巻きAの怒涛のドロ―に、そしてオベリスクブルーの実力に驚いていた

「俺は魔法カード最終戦争を発動！」

《最終戦争》

通常魔法

手札を5枚捨てる。フィールド上の全てのカードを破壊する。

「フィールドの全てを破壊する！」

大きな爆発が巻き起こりフィールドの全てを包み込むと全てのカードが破壊されていた

「そして手札からチェミナイ・エルフを召喚し魔法カード戦線復活の代償を発動！」

《戦線復活の代償》

装備魔法

自分フィールド上の通常モンスター1体を墓地へ送って発動する。

自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して自分フィールド上に 特殊召喚し、このカードを装備する。 このカードがフィールド上に存在しなくなった時、装備モンスターを破壊する。

「ヂェミナイ・エルフを墓地に送り墓地のコスモクイーンを蘇生して戦線復活の代償を装備させる」

「すげえ…」

あまりに無駄がない取り巻きAの戦い方に思わずそう呟いたあきらだった

「コスモクイーンでダイレクトアタック！」

あきら

LP4000 - 2900 = 1100

「ターンエンドだ！」

取り巻きALP100

フィールド魔法

無し

- - -

- - -

手札1枚

「面白くなってきた！俺のターンドロー！」

あきらからいつの間にか怒りは消え逆に楽しいと思う気持ちの方が強くなっていた

「俺は手札から魔法カードミラクルシンクロフュージョ「ガードマ

ンが来るわ！時間外に許可なく施設を使うのは禁止されているし、アンテイルールは校則で禁止されているから見つかったら校則違反で退学なるかもしれないわ！」マジかよ！いいところだったのになあ」
いつの間にかデュエルを見ていた明日香がそう言うのを聞いたあきらはすぐに決闘場の外に出ようとした

「待て！まだデュエルは終わってないぞ！」

「また今度デュエルしようぜー！」

と取り巻きAが言ったのを走りながらあきらは返事をした

あきらが決闘場を出て少ししてから十代たちも出てきた

「ブルーの洗礼を受けた気分どうあなたたち？」

と明日香は十代とあきらに聞いた

「まあまあかな」

「邪魔が入らなければ、アナタのベストカードは取られていたのよ？」

と明日香は十代の返事に対し十代が負けていたと指摘した

「いや、あのデュエル俺の勝ちだったぜ」

そういつて十代は持っていたカードを明日香にみせた

「このカードは！」

「この死者蘇生を使ってフレイム・ウィングマンを蘇生すれば俺の勝ちだったぜ」

その二人の会話を聞いていたあきは

(フレイム・ウィングマンは融合召喚以外じゃ特殊召喚できないんじゃない…)

と思ったが気にしない事にした

「あなたはとうだったあきら」

と明日香は今度はあきらに聞いてきた

「俺も完璧に勝てたよ」

「どつやって?」

そう聞かれたあきは明日香に持っていたカードを見せた

「ミラクルシンクロフュージョン?聞いたことないわね…」

《ミラクルシンクロフュージョン》通常魔法

自分のフィールド上・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、シンクロモンスターを融合素材とするその融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。また、セットされたこのカードが相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、自分デッキからカードを1枚ドローする。

「こいつで墓地のレッド・デーモンズ・ドラゴンとカオスエンドマスターを除外して波動竜騎士ドラゴエクイテスを出して攻撃すれば俺の勝ちだ」

《波動竜騎士ドラゴエクイテス》融合・効果モンスター

星10/風属性/ドラゴン族/攻3200/守2000

ドラゴン族シンクロモンスター+戦士族モンスター

このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。1ターンに1度、墓地に存在するドラゴン族のシンクロモンスター1体をゲームから除外し、エンドフェイズ時までそのモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る事ができる。また、このカードがフィールド上に表側攻撃表示で存在する限り、相手のカードの効果によって発生する自分への効果ダメージは代わりに相手が受ける

「あなたたち何者なの？オシリスレッドなのにブルーに勝つなんて...」

「ただのオシリスレッドの生徒だよ、なあ十代」

「ああ、あきらの言う通り俺たちはただのオシリスレッドの生徒だよ」

と十代はただのを強調して言った

「ところであきら君が言ってた次のデュエルで見せる面白いものってシンクロ召喚のことっすか？」

と若干空気になりかけていた翔があきらに聞いた

「そつだよ、けっこう面白かっただろ」

「面白いつていうか凄かったっす…」

「シンクロ召喚ってなんだ？」

「わたしも気になるわ、あんな召喚方法初めて見たもの」

とあきらと翔の会話を聞いていた十代と明日香があきらに聞いてきた

「十代、シンクロ召喚については後で教えてやるよ、次の試験でシンクロ召喚を使うから明日香はその時だな
じゃあ俺は寮に帰って寝るから」

「あ！待ちなさい！」

あきららは早口で言った後ダツシユで寮に帰っていった

「多分説明がめんどくさくて逃げたっすね…」

とある程度あきららの行動が読めてきた翔がそういった

「まあいいわ次の試験で分かるみたいだし、じゃあ私もそろそろ帰るわね、おやすみ十代、翔」

「おやすみなさい明日香さん」

「おやすみ明日香、また今度な」

したがってこの場合は解散となった

第三話VS万丈目の取り巻きA！（後書き）

いやー

今回もエクセリオンデッキでしたね

デッキのネタがなくなった訳ではないのですが

毎回手元のデッキをランダムに選んで

そのデッキを小説に出すようにしてるのでエクセリオンデッキにな
っちゃいました…

次回からはちゃんと見て選ぶので多分被りはないかと（デッキのネ
タが無くならない限りは）

デュエルの方は実際のデュエルを参考にして書いておかし点はな
いと思います

もしあつたら感想までお願いしますm（――）（m

それでは次回もお楽しみに〜（^―^）ノ

第四話 翔がラブレター！？（前書き）

今回からオリキャラが一人増えます

どんなデッキを使うかは見てのお楽しみです

第四話 翔がラブレター！？

前回の万丈目の取り巻きとのデュエルから何日かたっていた
あれから特に事件も起きずあきらたちは平和に過ごしていた

これはそんなある日の出来事である

「デュエルモンスターズのカードには
モンスターカード、

融合モンスターカード、儀式モンスターカード、効果モンスターカ
ード、そして…」

(眠いなあ)

あきららは明日香がクロノスから出された問いに真面目に答えてるの
を欠伸しそうになるのを耐えながら聞いていた

「~~~~フィールド魔法と分けることができます」

「完璧なノ〜ネ、オベリスクブルーのシニョール明日香には易しす
ぎる質問でしタ〜ネ」

とクロノスが誉めたのに対し

「基本ですから」

と明日香は一言だけ言って席に着いた

「それでは、シニョールあきら！フィールド魔法の説明をお願いしますス〜ノ」

あきらは正直めんどくさいと思ったが一応授業なので真面目に答えることにした

「フィールド魔法は発動させるとお互いに影響を与えるカードです、そして発動すると魔法・罨ゾーンではなくフィールド魔法ゾーンという専用の場所にいきます」

「よろしい、オシリスレッドのドロップアウトボーイにはなかなかなノーネ」

クロノスがドロップアウトボーイと言った辺りで教室の生徒の多数がクスクスと笑う声でした

それを聞いた十代が

「先生！でも所属してる寮と実力は関係ないですよ、俺もオシリスレッドの一人ですけど先生にデュエルで勝っちゃったし」

と言ったのを聞いて先ほどよりもたくさん生徒が笑う声が聞こえた

「マンマミ〜ヤ！」

と言いくロノスはハンカチを噛み締めとても悔しがっていた

（あのドロップアウトボーイだったらよくもワタシに恥を書かせてく

れたノ〜ネ、このままで済むと思ったたら大間違いでス〜ノ

クロノスは自室で手紙を書きながら心の中で呟いた

クロノスは手紙を書き終わると便箋にいれしっかりと封をすると手紙にキスマークをつけた

そしてクロノスはその手紙を体育の授業をしている十代のロッカーにいれた

（これで完璧でス〜ノ）そう心の中で呟きニヤリと笑うとクロノスはロッカールームを出ていった

「もう授業始まっちゃってるよ〜」

翔はそう言いながら走ってロッカールームに入ると急いで自分のロッカーを開け体育の準備を始めた

「もぉ〜アニキったら間違えて〜、ここ僕のロッカーだよ」

翔はそう言って十代の靴を十代のロッカーに移そうとした

その時、翔は自分のロッカーにキスマークの付いた手紙が入ってる事に気付いた

「え！これってもしかして!?!」

「じゃあこの状況ならあきはどつする？」

「俺だったらこいつを召喚するな」

あれから授業も全て終わり宿題も終わらせたあきらと十代は、二人で風呂上がりに十代の部屋でデュエルの話しをしていた

「そういえば翔はいないのか十代？」

ふと思い出したようにあきは十代に聞いた

「そういえばいないな、まだ風呂にも入ってないのにどこに行ったんだ翔の奴」

「そういえば体育の辺りからずっとおかしいよな翔……」

とそんな会話を二人がしていると

PPP! PPP!

と二人のPDAが鳴った

それを聞いたあきは

(まためんどくさい事になりそうだな)
と思いつつメールを開いた

『丸藤翔を預かっている。返して欲しくば女子寮まで来られたし』

「十代メール見たか!？」

「ああ!翔が大変だ!」

二人はそう言うと部屋を慌てて出ていった

(やっぱり来なかった方が良かったかも…)

丸藤翔が縛られている

その横でため息をつきながら神宮寺 蜜柑は心の中でそう呟いた

(この後どうなるか大体分かってるしなあ)

彼女もまたあきらと同じく異世界から来た人間だった

彼女には知らされてないがあきらが助けようとした車に轢かれそうな女の子とは彼女の事であり

あきらが介入した事で本来ならあの事故で死ななかったはずの彼女も死んでしまったのだ

もつともあきらが介入しなかった場合彼女は一生植物人間になっていたらしい…

「ねえ、いつ来るの？明日香が言ってた面白いデュエルする人って？」

「もつすぐ来るはずよ」

蜜柑の問いに対しそう一言返すと明日香はボートでこちらに向かってくる十代たちを見つけた

「十代達が来たみたいね」

（十代達？十代一人じゃないの？）

原作を知っている蜜柑はそう疑問に思ったが「自分というイレギュラーがいるしまあいつか」とポジティブに考え十代達を待った

それから数分後あきら達が明日香達の元へ辿りついた

「アニキ〜あきらくん」

「翔！大丈夫か！」

「翔、これは一体どういうことなんだ？」

あきらと十代がそれぞれ翔を心配しそう話しかけた

「それが、話せば長くなるようなような…」

「この翔君って人が女子寮のお風呂を覗いてたんだって」

「覗いてないって！」

と翔の代わりに蜜柑が答えたが翔がすぐに反論していた

「翔：確かにレッド寮に女の子はあまりいないがまさかそこまで女の子に飢えていたとは…」

「だから覗いてないって！」

「冗談だよ」

とあきらが翔で遊んでいると

「ねえあなた達、わたし達とデュエルしない？

もしわたし達のどちらかにあなた達が勝ったら風呂場覗きの件は大目に見てあげるわ」

と明日香が十代達に提案した

それを聞いたあきら達は

「望むところだ！なあ十代もいいだろ？」

「なんだかよく分かんないけど、デュエルなら受けてたつぜ！」

と二人とも明日香の意見に賛成した

「ならわたしは十代と、蜜柑はあきら君とデュエルしましょう。蜜柑もそれでいい？」

明日香が十代達提案し蜜柑にもそう聞くと

「うん！デュエルできるなら誰でもいいよ」

と蜜柑はうれしそうに返事した

最初は十代一人しか来ないから自分はデュエル出来ないと思っていた
た蜜柑だったが

自分もデュエルできると知ってデュエルが大好きな彼女はテンションが上がっているようだ

「俺はそれでいいぞ」

「オレもそれでいいぜ！」

とあきら達も明日香の提案に賛成した事で翔の無実を勝ち取るデュエルが始まった

「僕どうなるんだろう…」

翔がそう呟いたのを聞いている者はだれもいなかった…

「蜜柑っていうんだよな、楽しいデュエルにしようぜ！」

「えっとたしか…あきら君って言うんだよね？「こちらこそよろしくね」

とお互いが挨拶をした所でデュエルが始まった

「デュエル！」

「じゃあ先攻もらっね、ドロー！」

蜜柑はそう言うとデッキからカードを引き抜き手札を確認する

「じゃあわたしは手札から黒い旋風を発動します！」

《黒い旋風》

永續魔法（準制限カード）自分フィールド上に「BF」と名のついたモンスターが召喚された時、自分のデッキからそのモンスターの攻撃力より低い攻撃力を持つ「BF」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

「なんで!？」

あきらは蜜柑が発動させたカードを見てデッキがある程度予測できてしまい思わずそう声をあげてしまった

それを見た蜜柑は心配そうに

「なにかしました？」

とあきらに尋ねたが

「いや…何でもない」

「じゃあ続けますね」

あきらが少し元気なくそう答えると蜜柑はデュエルを再開させた

「わたしは手札からBF - 蒼炎のシユラを召喚します

さらに黒い旋風の効果で黒槍のブラストを手札に加えますね」BF

- 蒼炎のシユラ

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1800 / 守1200

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから攻撃力1500以下の「BF」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。こ

の効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

「さらに黒槍のブラストを自身の効果で特殊召喚」

B F - 黒槍のブラスト

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1700 / 守 800

自分フィールド上に「B F - 黒槍のブラスト」以外の「B F」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「可愛く言ってるけど凄い展開力っすね…」

蜜柑の場に一瞬で二体のモンスターが並んだのを見た翔は思わずそう呟いていた

「すごいでしょ翔君

わたしはリバーズカードを一枚伏せてターン終了だよ」

蜜柑LP4000

フィールド魔法

無し

-
-
-

手札3枚

「やっぱりBFかよ！俺のターンドロー！」

BFの恐ろしさを知っているあきらはそう蜜柑にツッコミを入れながらカードをドロウする

「俺は手札から沼地の魔神王の効果を発動して融合を手札に加える！」

沼地の魔神王

効果モンスター

星3 / 水属性 / 水族 / 攻 500 / 守 1100

このカードを融合素材モンスター1体の代わりにする事ができる。

その際、他の融合素材モンスターは正規のものでなければならぬ。

また、このカードを手札から墓地へ捨てる事で、デッキから「融合」魔法カード1枚を手札に加える。

「あきら君が融合が必要なデッキ使っの初めて見たっす」

と翔はあきらが融合を使おうとしている事に驚いている

「まあたまには使っさ、俺は手札からE・HEROプリズマーを召喚！」

あきらはそう翔に返事をするともンスターを召喚した

《E・HEROプリズマー》効果モンスター

星4 / 光属性 / 戦士族 / 攻 1700 / 守 1100

自分の融合デッキに存在する融合モンスター1体を相手に見せ、そ

のモンスターにカード名が記されている融合素材モンスター1体を自分のデッキから墓地へ送って発動する。このカードはエンドフェイズ時まで墓地へ送ったモンスターと同名カードとして扱う。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「俺はプリズマーの効果で融合デッキからブラックパラディンを見せてデッキからバスターブレイダーを墓地に送りプリズマーを变身させる！」

あきらがプリズマーの効果が発動するとプリズマーは一瞬でバスターブレイダーへと変化していた

超魔導剣士・ブラック・パラディン

融合・効果モンスター

星8 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻2900 / 守2400

「ブラック・マジシャン」+「バスター・ブレイダー」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、手札を1枚捨てる事で、魔法カードの発動を無効にし破壊する。このカードの攻撃力は、フィールド上及びお互いの墓地に存在する

ドラゴン族モンスター1体につき500ポイントアップする。

バスター・ブレイダー

効果モンスター 星7 / 地属性 / 戦士族 / 攻2600 / 守2300

このカードの攻撃力は、相手フィールド上及び相手の墓地に存在するドラゴン族モンスター1体につき500ポイントアップする。

「さらに手札から召喚師のスキルを発動してブラック・マジシャン

を手札に加える！」

《召喚師のスキル》

通常魔法

自分のデッキからレベル5以上の通常モンスターカード1枚を選択して手札に加える。

《ブラック・マジシャン》

通常モンスター

星7 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻2500 / 守2100 魔法使いと

しては、攻撃力・守備力ともに最高クラス。

「『ブラック・マジシャン！』」

とあきらのデュエルを横目で見ていた明日香と十代、そして初めの方から見ていた翔が驚きの声をあげた

それもそのはずこの世界ではブラック・マジシャンはデュエルキングと呼ばれた武藤遊戯が所持するカードの一つでとてつもないレアカードだからだ

「説明は後です、今はデュエルに集中しようぜ」

とあきらは十代と明日香に言うとデュエルを再開させた

「俺は手札の融合を発動し場のバスターブレイダー（プリズマー）と手札のブラック・マジシャンを融合！超魔導剣士・ブラック・パラディンを融合召喚！」

あきらの場に黒い鎧を着て剣を持った剣士が現れた

「さらに融合回収を発動！融合とプリズマーを手札に加える」

《融合回収》

通常魔法

自分の墓地に存在する「融合」魔法カード1枚と、融合に使用した融合素材モンスター1体を手札に加える。

「バトル！ブラック・パラディンで蒼炎のシユラに攻撃！超魔導無影斬！」

「長かったから待つの大変だったよ、わたしはブラック・パラディンの攻撃宣言時に次元幽閉を発動するよ、ブラック・パラディンを除外」

《次元幽閉》

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。その攻撃モンスター1体をゲームから除外する。

「うわ：リバーズカードを一枚伏せてターンエンド」
（まだいける！翔のために絶対勝つ！）

せっかく出したブラック・パラディンが除外されてショックを受けたが

あきらは翔のために勝つことだけを考えて自分に気合いを入れた

あきら LP 4000

フィールド魔法

無し

- - - -

- - - -

手札 4枚

「わたしのターンね、ドロー！」

そういつてカードをドローする蜜柑はとても楽しそうだった

「手札からフィールド魔法ダークゾーンを発動するね」

ダークゾーン

フィールド魔法

全ての閻属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、
守備力は400ポイントダウンする。 守

蜜柑がフィールド魔法を発動させると周りの風景が暗くなり
BFたちに攻撃する力を与えたがBFたちの守る力を奪っていった

蒼炎のシユラ

攻撃力

1800 + 500 = 2300

守備力

1200 - 400 = 800

黒槍のブラスト

攻撃力

1700 + 500 + 2200

守備力

800 - 400 = 400

「さらに手札から漆黒のエルフェンを自身の効果で生け贄なしで召喚するよ、さらに黒い旋風の効果で月影のカルートを手札に加えるね」

《BF - 漆黒のエルフェン》効果モンスター

星6 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻2200 / 守1200

自分フィールド上に「BF」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、このカードはリリースなしで召喚することができる。

このカードが召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するモンスター1体の表示形式を変更することができる。

《BF - 月影のカルート》効果モンスター

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1400 / 守1000

自分フィールド上に表側表示で存在する「BF」と名のついたモンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで1400ポイントアップする。

漆黒のエルフェン

攻撃力

2200 + 500 = 2700

守備力

1200 - 400 = 800

「そしてわたしの場に三体のBFがいるから手札からデルタ・クロウ・アンチ・リバースを発動するね」

《デルタ・クロウ・アンチ・リバース》

通常罫

自分フィールド上に「BF」と名のついたモンスターが 表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。相手フィールド上にセットされた魔法・罫カードを全て破壊する。また、自分フィールド上に「BF」と名のついたモンスターが3体存在する場合、このカードは手札から発動する事ができる。

「そうはさせるか！チェーンして王宮のお触れ発動だ！これでそいつを無効にする！」

《王宮のお触れ》

永続罫（準制限カード） このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカード以外のフィールド上の罫カードの効果を無効にする。

あきららはリバースカードを発動させ自分のカードが破壊されるのを防いだ、といっても伏せはこの一枚だけだか…

「かわされちゃったか、でも全部の攻撃が通ればわたしの勝ちだよね 漆黒のエルフェンで攻撃」

そう蜜柑が言うとエルフェンはあきらに攻撃を仕掛けるがそれがあきらに届くことはなかった

「攻撃宣言時に手札からバトルフェーダーの効果を発動！こいつを

特殊召喚してバトルフェイズを終了させる！」

そうあきらがいうとフィールド上に鐘の音が響きバトルフェイズは終了した

《バトルフェーダー》

効果モンスター

星1 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻 0 / 守 0 相手モンスター

の直接攻撃宣言時に発動する事ができる。このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する。この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

バトルフェーダー

攻撃力

0 + 500 = 500

守備力

0 - 400 = 0

「あらら…これも防がれちゃったか…」

と少し残念そうにいいながら

「わたしはカードを一枚セットしてターンエンドだよ」

蜜柑 LP 4000

フィールド魔法

ダークゾーン（蜜柑）

-

-

手札 3枚

「俺のターンドロー！」

あきらはデッキから引いたカードを確認すると

目当てのカードを引けた事に笑顔になりそのまま引いたカードを發動させた

「俺は魔法カード未来融合・フューチャーフュージョンを發動！選択するのはF・G・Dだ！墓地に送るドラゴン族は伝説の白石三枚と仮面竜二枚だ！伝説の白石の効果で青眼の白龍を手札に加えるぜ！」

《伝説の白石》

チューナー（効果モンスター）

星1 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻 300 / 守 250 このカードが墓地へ送られた時、自分のデッキから「青眼の白龍」1体を手札に加える。

《仮面竜》

効果モンスター

星3 / 炎属性 / ドラゴン族 / 攻1400 / 守1100 このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

《青眼の白龍》

通常モンスター

星8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2500
高い攻撃力を誇る伝説のドラゴン。どんな相手でも粉碎する、その

破壊力は計り知れない。

「ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン!?」「」

と先ほどのブラック・マジシャンの時のように明日香、十代、翔の三人がかなり驚いていた

これも驚くのが当然である、ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンは世界に数枚しかなくそれらはKCの社長が所持しているため普通の人が持っているはずがないのだ

「後で説明するよ」

「前のシンクロ召喚の時みたいに逃げないでね」と前回シンクロ召喚について聞きそびれた明日香があきらに言った

「気をつけるよ...」

とあきらは少しめんどくさそうにそう言った

すると突然

「なんであなたがシンクロ召喚を？」

と蜜柑があきらに聞いてきた

蜜柑は自分以外にシンクロ召喚を使う者が居たことに驚いているよ
うだった

「そう言う蜜柑もシンクロ召喚使っんだろ、BFだし」

「やっぱりわたしのBFの事知ってたんだ」

「あなたも異世界人なの？」

と蜜柑は最後の方はあきらただけに聞こえるように質問した

「そついうこと、そんなことより早くデュエルの続きしようぜ」

あきららは早くデュエルの続きがしたくてウズウズしているようだ

「いいよ わたしも今のデュエルを楽しみたい！」

と蜜柑があきららに返事をしてデュエルが再開された

「俺は手札の融合を発動！手札の三体のブルーアイズを融合してブルーアイズ・アルティメットドラゴンを融合召喚する！」

《青眼の究極竜》

融合モンスター

星12 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻4500 / 守3800

「青眼の白龍」 + 「青眼の白龍」 + 「青眼の白龍」

「さらに手札の融合を発動！場のブルーアイズ・アルティメットドラゴンと手札のカオスソルジャーを融合して

俺の切札！マスター・オブ・ドラゴンナイトを融合召喚！」

《カオス・ソルジャー》

儀式モンスター

星8 / 地属性 / 戦士族 / 攻3000 / 守2500 「カオスの儀式」

により降臨。

《究極竜騎士》

融合・効果モンスター

星12 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻5000 / 守5000

カオス・ソルジャー」+「青眼の究極竜」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードを除く自分のフィールド上のドラゴン族モンスター1体につき、このカードの攻撃力は500ポイントアップする。

「レアカードのオンパレードっすね……」

「それ正規融合する人初めて見たよ……」

と翔と蜜柑があきらの出したモンスターを見てそれぞれ感想を言っている

「まあ今回は頑張ったからな、とりあえず黒槍のブラストに攻撃！
ギヤラクシー・クラッシュャー！」

そうあきらが宣言すると究極竜騎士は黒槍のブラストに攻撃を仕掛けた

5000 - 2200 = 2800

蜜柑

LP4000 - 2800 = 1200

「俺はターンエンドだ」

あきらLP4000

フィールド魔法

ダークゾーン（蜜柑）

- -

- -

手札一枚

「面白くなってきたね わたしのターンドロ―！」蜜柑は楽しそうにそう言つとデッキからカードをドロ―した

「わたしは手札から月影のカルートを召喚して黒い旋風の効果を発動させるよ、効果で疾風のゲイルを手札に加えてレベル3チューナー疾風のゲイルを自身の効果で特殊召喚」

《BF - 疾風のゲイル》

チューナー（効果モンスター）（制限カード）

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1300 / 守400

自分フィールド上に「BF - 疾風のゲイル」以外の「BF」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃力・守備力を半分にする事ができる。

月影のカルート

攻撃力

1400 + 500 = 1900

守備力

1000 - 400 = 600

疾風のゲイル

攻撃力

1300 + 500 = 1800

守備力

400 - 400 = 0

「「蜜柑もチューナーを（使うの）！？」」

と蜜柑がチューナーを使うと知らなかった明日香、翔、十代が驚きの声をあげた

今日は何かと驚く事の多い三人である

「今まで使う機会が無かっただけで前からあったよ」

と蜜柑は明日香に言った

とてもいい笑顔でそう言うので明日香もあまり追求はしなかった（というよりする気が起きなかった）

「じゃあ続けるよ、ゲイルの効果でマスター・オブ・ドラゴンナイトの攻撃力を半分にするよ」
と楽しげに蜜柑は言っているが
相手をしているあきらからしたら笑いごとではないであろう効果が
発動された

究極竜騎士

攻撃力

5000 ÷ 2 = 2500

「じゃあシンクロするね レベル3月影のカルートにレベル3疾風のゲイルをチューニング！

漆黒の力！大いなる翼に宿りて、神風を巻きおこせ！シンクロ召喚！吹きすさべ、BF-アームズ・ウィング！」

蜜柑の場に大きな槍をもった羽の付いた男が現れた

《BF・アームズ・ウイング》シンクロ・効果モンスター

星6 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻2300 / 守1000 「BF」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードは守備表示モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が500ポイントアップする。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

アームズ・ウイング

攻撃力

2300 + 500 = 2800

守備力

1000 - 400 = 600

「これが蜜柑さんのシンクロモンスター…」

翔は蜜柑が出したシンクロモンスターを目の当たりにして言葉が出ないようだった

「じゃあいつくよ、BF・アームズ・ウイングでバトルフェーダーに攻撃！ブラック・チャージ！」

蜜柑がそう宣言するとアームズ・ウイングは手に持っていた槍でバトルフェーダーに攻撃を仕掛けた

「ちなみにアームズ・ウイングは守備表示モンスターに攻撃する時ダメージステップの間だけ攻撃力が500ポイントアップするんだよ」

アームズ・ウィング

攻撃力

2300 + 500 + 500 = 3300

3300 - 0 = 3300

あきら

LP4000 - 3300 = 700

「バトルフェーダーは自身の効果で除外される…」

そう言うとききはバトルフェーダーのカードを自分のポケットにしまった（除外する時はこうするらしい）

「さらにエルフェンでマスター・オブ・ドラゴンナイトに攻撃！」

エルフェン

攻撃力

2200 + 500 = 2700

2700 - 2500 = 200

あきら

LP700 - 200 = 500

「蒼炎のシュラでダイレクトアタック！」

蒼炎のシュラ

攻撃力

1800 + 500 = 2300

500 - 2300 = 0

「ありがとう 楽しかったよ」

「今度やる時は絶対俺が勝つ！だからまた今度デュエルしよう！」

と二人が握手をして友情を確かめあつてると

「どうしよう…アニキが勝たなかったら僕覗き扱いされちゃうよ…」

とあきらが負けるといふ翔には予想外の事態が起こったので翔はかなり不安になっていた

(とりあえず今からでもアニキを応援しよう)

そう翔は心の中で呟いて十代のデュエルを見てみるとちよつど決着がつくところだった

「サンダージャイアントでダイレクトアタック！ボルティック・サンダー！」

十代が攻撃宣言をするとサンダージャイアントは手から雷をだし明日香に攻撃した

明日香

LP2400 - 2400 = 0

「ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

「約束通り翔は連れて帰るぜ」

「どうぞ、約束は守るわ」

と明日香と十代が話していると

「わたし勝ったのに…」

とデュエルに勝ったのに勝負に負けた蜜柑が残念そうに言った

「ごめんね蜜柑、あたしが負けたから」

と明日香が蜜柑に謝ると

「まあ別に気にしてないんだけどね
と蜜柑が明るく返した

「じゃあ俺たちはそろそろ帰るよ、またな明日香、蜜柑」

「じゃあな」

「今度はこういふんじゃないわなくて普通に話しをしようね」

と上からあきら、十代、翔の順番でそれぞれが別れの挨拶をした

ちなみにボートはあきらと十代が漕いでいる

「また今度ね」

と夜中にもかかわらず大きな声で蜜柑は遠ざかっていく三人に向かつて叫んだ

「じゃあ私たちも帰ろうか、明日香」

「ええ帰りましょう」

それから、なんでわたしにシンクロ召喚の事を今まで隠してたのかじっくり聞いてあげるから」

と少し怒りのオーラを纏いながら明日香は蜜柑に言った

「明日じゃ…だめ？」

と蜜柑は大体の男子なら一瞬で惚れてしまいそうなくらい可愛く言っただが

「だめね」

とあっさり一言で返されてしまった

それからシンクロ召喚を隠していた事の説明と

シンクロ召喚について明日香の怒りが静まるまで説明するのに数時間がかかったらしい…

一方その頃ボートでは

「偽ラブレター！？
だれがそんな事を…」

「僕にも分からないんスつよアニキ…」

「もしかしたら誰かが翔を恨んでいて翔を罠にはめたとか…」

「怖いから止めてあきら君！」

と三人で楽しそうに会話をしていた

「あ！そういえば！？」

「どうかしたのか翔？」急に大声を出した翔に驚ろきながらも十代は翔に質問した

「なんであきら君はブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンやブラック・マジシャンとかレアカードをいっぱい持つてるんスか？
それにシンクロやチューナーとかどこで手に入れたの？」

「オレも気になる！あきら教えてくれよ！」

「エ、ナンノコトカワカラナイ」

「明らか棒読みっスよあきら君…」

それからブルーアイズの事やシンクロモンスターの入手経路の言い訳考えて説明するのに一時間以上かかったらしい…

第四話 翔がラブレター！？（後書き）

今回はどうだったでしょうか

新しいキャラも出迎えて少しは豪華になりましたね
ちなみにあきらのデッキは「とりあえず融合しようよデッキ」です、
ただ融合をしてビートするだけのシンプルなデッキ…
「おい作者！ももえとジュンコがでてねえじゃねえか」

お！あきら君

作者の力量じゃそんなにキャラは増やせませんよ

「じゃあなんでオリキャラ出したんだよ

あとジュンコ&ももえファンに謝れ」

ジュンコ&ももえファンの読者さんすみませんでした
ただ単に作者の力量不足です…

彼女をだしたのはガチデッキ担当を作りたかったからです

ちなみに主人公とフラグが立つかはまだ未定です

わたしには恋愛要素を書く力が…

あと彼女の名前の由来は特にはないです
頭に浮かんだ名前をつけました
それじゃ今回はこのへんで

「次回もお楽しみに〜」

番外編キャラ設定（前書き）

アクセス1万突破したのでとりあえずキャラ設定作ってみました

もしかしたら設定に穴があったりオリキャラのイメージが沸きずらかったりするかもしれませんがご容赦ください（笑）

番外編キャラ設定

かみの
神野あきら

年齢 15歳

身長、計ったのは随分前だから分からないが十代と同じくらいby
あきら

体重、58Kg

髪の色は黒で常に短かくしている

デュエルをするのが大好きな普通の少年だったが
ある日突然、本来ならもつと長生きするのにはずなのに死んでしま
った

しかしそれを見た神があきらの事を不憫に思い、
あきらが前から行きたがってた「遊戯王GX」の世界へあきらを送
った

前の世界で死んだ理由は交通事故、本人はその時の事を曖昧にしか
覚えていないらしく

女の子を庇ったのは覚えているが顔までは覚えていないらしい

性格は本人曰く「優しい」らしいが、寝ているところを特に用もな
いの起こされるかくだらしない用事で起こされると怒りが爆発する
ちなみにルックスは普通だが女の子への気遣いがよくできるため一

部の女子生徒からは人気がある

またデュエルをしているとつい熱くなり口調が変わり熱血になることがあるらしい

今まで使用したデッキは【エクセリオンデッキ（種族統一型）】と【エクセリオンデッキ（シンクロ+ドラゴエクイテス型）】
そして【萌え萌えデッキ】と【究極竜騎士正規融合デッキ】と【サイキック族（ガンナー/軸）】の五つ

しかし本人曰くまだまだ隠しているデッキがあるらしくこれからも使用するデッキは増える予定だがいつか使うデッキをどれか一つに絞りたいと思っっているらしい

ちなみに好きな食べ物は「エビフライ」嫌いな食べ物は以前ドロパンで食べた「具なしパン」らしい

じんぐうじ みかん
神宮寺蜜柑

年齢15歳

身長、詳しくは言えないけど割りと小柄だよby蜜柑

体重、これはちょっと…by蜜柑

髪は黒色で髪型はショートヘア

前の世界にいた時から
毎日デュエルをしないと気がすまなくらいのデュエル好き少女
だった

彼女もあきらと同じく本来もつと長生きするはずだったがあきらが
下手に庇おうとしたせいで死んでしまった

しかしそれを不憫に思った神が蜜柑が前から行きたがっていた「遊
戯王GX」へと蜜柑を送った

もつともあきらが庇わなかったら交通事故で一生寝たきりの植物人
間になっていたらしいが…

ちなみに自分が死んだ時の事は一切覚えていないらしい

性格は本人曰く「明るい」との事

男女関係なく誰にでも気軽に話しかける性格でルックスもかなりい
いため男子生徒から人気が高い

ちなみにアカデミアに入学してから一番最初の友達が明日香らしく
明日香とは特に仲がいい

今まで使ったことのあるデッキは【BFデッキ】の一つだけ

蜜柑もあきら同様たくさんデッキを持っているらしく、その日の気
分で使い分けるらしい

好きな食べ物は

「イチゴパフェ」

嫌いな食べ物は

好き嫌いはしないよb y蜜柑
とのこと

番外編キャラ設定（後書き）

一応設定としてはこんな感じですよ

これから新しいデッキを使う度に更新していく予定です

話が変わりますが主人公がデュエルした万丈目の取り巻きって名前あるんでしょうか？

アニメを見ながら小説を書いているので先のことあまり分かんないんですよ…

知ってる方いたら教えてください

もしあの取り巻きAに名前がなかった場合は名前を募集するので感想にご自由にお書きください

次に小説書くときまでに一つも集まらなかったら自分で考えますが…

それでは次回もお楽しみに

第五話 実技試験！（前書き）

万丈目の取り巻きAがほとんどオリキャラ化してる気がする…

第五話 実技試験！

翔の偽ラブレター事件から数日たったある日
とうとう入学してから一回目の試験の日がやって来た

「よっ！三沢なにしてんの？」

テスト当日なのでいつもより早く教室に来ていたあきは、自分より先に教室に来ていた三沢を見つけると声をかけた

「見ての通り筆記試験のために教科書で復習してたのさ、あきらも一緒に復習するかい？」

「いいよ、一緒にやるっ」

あきはそう言っていると教科書をカバンから出し、勉強を始めた

あきらたちが勉強をしていると
次第に教室にいる生徒の数が増えてきていた

それでもあきら達が勉強を続けていると

「あきらおはよー」

「今日は教室に来るのが早いわね、いつも遅刻ギリギリに来るのに」
と蜜柑と明日香があきら達に話しかけてきた

「おはよう蜜柑、明日香、あと明日香！さすがにテストの日くらい俺だって早く来るよ！」

「あら、いつも遅刻ギリギリの人の言葉とは思えないわね」

「明日香ひどいや…」

あきらが明日香にあきらがなぜ青眼の白龍などを持っていたかを説明するのを忘れていたため
少し明日香はあきらに対し冷たくなっていた

「あの件に関しては本当にごめん」

「気にしてないから大丈夫よ、さっきのはジョーク」

「なんだジョークか…良かった」

と明日香とあきらが会話をしていると

「ねえあきら、その人だれ？」と三沢があきらに聞いてきたので

(そういえば蜜柑達って三沢とまだ会ってなかったな…)

と思ったあきは蜜柑達二人に三沢を紹介する事にした

「こいつは三沢大地っていつて俺の友達の中で唯一のラーイエローなんだ」

とあきらが蜜柑達に三沢を紹介すると

「わたし蜜柑って言うんだ、入学試験見てたよ、凄かったね三沢君！これからよろしくね」

「私は天上院明日香よ、三沢君っていうのよね？これからよろしく」

「蜜柑君に明日香君だな、二人ともよろしく」

とそれぞれ自己紹介が終わった所で試験の先生であるレッド寮の寮長の大徳寺先生が教室に入ってきた

「それじゃあ、みんなこれから試験だから席につくんだにやー」

大徳寺先生のその言葉を聞いたあきら達四人はそれぞれの席へ移動した

そして試験が始まってから数十分後…

(やっと終わったあああ！あとは寝てよっと)

あきららはテストを全て書き終えたので眠る事にした

そして試験が終了すると

「起きろ、三人とも！」

という三沢の声であきは目を覚ました

「うわっ！びっくりした〜」

「やっちゃった〜何の為に勉強したんだか…」

とテスト開始からずっと寝てしまった翔はショックを受けていた

「気にすんな、午後の実技テストが本番だぜ」

と遅刻して殆ど何も書いていなかった十代は翔を励ました

その時翔はある事に気が付いた

「あれ？みんなは？」

「そういえば俺たち以外に誰もいないな」

「もう昼飯か？」

とあきら達が疑問に思っている

「購買部さ、何せ「新しいパックが大量入荷するからね」

と三沢と蜜柑が教えてくれた

「…というか蜜柑いたんだ…」

「失礼だなあきら君は〜」

とあまり怒っていない様子で蜜柑はあきらに言った
その時

「なああきらに蜜柑に翔！早くパック買いに行こうぜ！」

と言って十代は購買部の方に走っていった

「新しいカードは要らないんだけどな…まあいいや、また後でな三
沢」

「じゃあね三沢君」

と言ってあきらと蜜柑は先に走っていった十代と翔を追いかけに言
った

「ああ！実技試験会場で会おう！」

三沢は段々遠ざかっていくあきら達にそう言った

「どうなってんだ…」

「売り切れちゃったんすかね？」

あきら達二人より先に購買部についた十代と翔は誰も生徒がいない
購買部を見てそう言った

「誰もいないな…」

「だれもいないね…」

少し遅れて購買部にたどり着いたあきらと蜜柑も十代達と似たような事を呟いていた

「とりあえず店員に話しを聞いてみよう」

とあきらが提案し十代達は店員に話しを聞く事にした

「すみません、もうパックはないんですか？」

蜜柑が店員にそう聞くと

「実はたくさん買っていった生徒さんがいてあと一パックしかないんです」

「一パックだけ!?!」

店員の言葉を聞いた十代と翔は思わずそう声をあげていた

ちなみにあきらと蜜柑は今のテスト用のデッキに、新しいカードを入れる気が無いため特にショックは受けてなかった

「俺は要らないから十代達で誰が買うか決めてくれ」

「わたしも今からデッキ調整する気ないから十代君と翔君で決めて

「いよいよ」

蜜柑とあきららがそう言つと

「じゃあ翔が買ってくれよ」

「いいの？最後の一パックだよ！？」

「いって！それよりまだ実技まで時間がある、早くみんなでデッキを組み立てに行こうぜ！」

十代と翔の間で話しが纏まった、その時不意に

「お待ちよ！」

とカウンターからあきら達を引き留める声が出た

「ああ今朝のおばちゃん！」

「おばちゃんじゃないわよ、トメって呼んでトメ（ハート）」

「トメさんって購買部のおばちゃんだったんだ」

「十代君の知り合いなの？」

「ちよつと訳ありだな」

実は十代はテストの前に遅刻ギリギリで登校している時に車が動か

なくて困っていたトメさんを助けていたのだった

「それよりこっちへいらっしやいよ、いいのがあるわよ」

とトメさんに誘われたあきら達はカウンターの奥に行った

「実はこれ取って置いたのよ、これは車を押してくれたお礼だよ、
だってオシリスレッドのじゃレアカードの一つもないとさ」

そう言つとトメさんは十代にパックを一つ手渡した

「良かったな十代！」

あきらがそう言つと

「ああ！」

と本当に嬉しそつに十代は心からそう言つた

一方その頃

「だれだあいつ！カードを買い占めやがって！」

とかなり怒つた様子で万丈目の取り巻きBこと山村晃彦（あきひこ）は言った

「…」

「おい聞いているのか！」

「ああ、わりい……」

あきらとのデュエルの後取り巻きAこと芳川遼太は考え事が多くなつていた

(あいつと……あきらと決着を着けたい！)

最近の遼太はそう思う気持ちが段々と強くなっていた

「はあ……遼太はもういいや、どうします万丈目さん」

「慌てるな、実技テストで新たなカードを仕込む事はない」万丈目慌てていた晃彦に対しそう言った、その時

「しかしその相手が遊戯十代や神野あきらだったらどうなノーカナ？」

「なにい？」

「……」

「今のデッキで十代やあきらに勝てルーノですかー」

「ああ！お前はカードを買い占めた奴！？」

いきなり現れた全身黒い服を着た男は

晃彦が言っていたように先ほど十代達が買おうとしていた種類のパ
ックを買い占めた男だった

「購買部のカードなら今ここにー」

そう言った黒い男が自分が着ていたマントを広げると、そこにはた
くさんのカードがあった

「ふふふ、ワタシーノ正体は」

そうやって黒い服の男が自分の着ていた服を取った姿を見た万丈目は

「遊戯十代に負けたクロノス教諭！」

「そんな事はともかくあのドロップアウトボーイズを早い内にエリ
ートであるあなた達が叩き潰さないといけませんーノ、だからワタ
シは貴方達に申し付けますーノ」

そう言ったクロノスは万丈目と遼太を指差し
さらにこう言った

「シニョール万丈目は十代と、シニョール芳川は神野あきらと戦い
なさい」

それを聞いた万丈目はクロノスに対し

「しかし！実技試験は同じ寮の者で行われんじゃ！？」

と指摘した、がしかし

「マツカセナサーイでスーノ」

と自信満々にクロノスは言った

（購買部のカードは要らないが、あきらとデュエルできるいい機会だ）

と遼太はかなり喜んでいた

「ええ！なんでオレが万丈目と!?!」

「俺も万丈目の取り巻きとデュエルだ、なんでだよ…!」

そう聞いたあきら達に対しクロノスは

「オシリスレッドでは貴方たちと釣り合いがとれないーノでそれぞれふさわしいと思った対戦相手を選んだノーネ、もし君達が勝てばライイエラーに昇格という事になりマース、ですがいかがでスーノ遊戯十代君そして神野あきら君この申し出受ける気になりますですかーノ?」

と若干ムカつく（b yあきら）しゃべり方でクロノスはあきら達に聞いた

「いいぜ！オレいろんな奴とデュエルをやってみたい、どんな奴の挑戦でも受けるぜ！」

「よし、この前のケリをつけてやる」

万丈目がそう言ったのをきっかけにして十代たちのデュエルが始まった

「デュエル！」

「シニョールあきらはどうすルーノですか？」

「もちろん受けてたちますよ」

そうあきららはクロノスに返すと

「あの時の決着をつけようぜ取り巻きA！」

と遼太に言った

「俺はそんな名前じゃない、遼太と呼んでくれ」

「ああ！じゃあ早くデュエルしようぜ！」

「もちろんだ！」

こうしてあきらと遼太のデュエルが始まった

「デュエル！」

「俺のターンドロ―！」

あきらはそう言うのとデッキからカードを引き抜き手札のカードをデスクにカードが傷付かないよう気をつけつつ叩きつけるように置いた

「俺はクレボンスを攻撃表示で召喚！」《クレボンス》
チューナー（効果モンスター）

星2 / 闇属性 / サイキック族 / 攻1200 / 守 400

このカードが攻撃対象に選択された時、800ライフポイントを払う事でそのモンスターの攻撃を無効にする。

「なんだあのカード？初めて見るぞ」「サイキック族なんて種族あったっけ？」「あのチューナーって何の意味があるんだ」

などあきらのデュエルを見ていた生徒たちが騒ぎだしていた

（あれがあきらの言っていた面白いものか…）

と三沢は心の中で呟いていた

「外野が五月蠅いが続けるぞ、俺はカードを二枚セットしてターンエンド」

あきらLP4000

フィールド魔法

無し

- - -

クレボンス

-
-
-
手札3枚

(これからはより分かりやすくするためにフィールドに表側で存在するカードの名前も書きます)

「俺のターンドロー！」

遼太はそう言ってカードをデッキから引き抜いた

「ジエネティック・ワーウルフを攻撃表示で召喚！バトルだ、ジエネティック・ワーウルフで攻撃」

ジエネティック・ワーウルフ ATK2000 VS クレボンス
ATK1200

「クレボンスの効果を発動！ライフを800支払って攻撃を無効にする！」

あきら

LP4000 - 800 = 3200

「なら俺は凡骨の意地を発動しカードを一枚セットしてターンエンドだ！」

遼太LP4000

フィールド魔法

無し

-
-
-

ジエネティック・ワーウルフ

-
-
-
凡骨の意地
手札三枚

「俺のターンドロー！」

あきらがそう言ってカードを引き抜いた時、遼太があきらに話しかけてきた

「前にお前とデュエルした時…お前は俺の知らない召喚方法を使い、俺の予想を上回る戦法でデュエルしてきた」

それを聞いたあきらはああと一言返事をした

「あのデュエルはとても楽しかった…
初めて勝ち負け関係なしにデュエルを楽しみたいと思った、だから！！」遼太が話すのをあきはただ静かに聞いていた

「レッドとかブルーとか関係無しに楽しいデュエルにしようあきら
！」

「ああ！もちろんだ！」

あきらは、下の寮の人間を見下していた遼太の性格が自分とのデュエルでデュエルを楽しみたいと思う性格に変わっていた事をとて嬉しく思っていた

「じゃあいくぜ！俺は手札からフィールド魔法、脳開発研究所を発動！」

《脳開発研究所》

フィールド魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、通常召喚に加えて1度だけサイキック族モンスター1体を召喚する事ができる。この方法でサイキック族モンスターの召喚に成功した時、このカードにサイコカウンターを1つ置く。

また、自分フィールド上に存在するサイキック族モンスターの効果を発動するためにライフポイントを払う場合、代わりにこのカードにサイコカウンターを1つ置く事ができる。このカードがフィールド上から離れた時、このカードのコントローラーはこのカードに乗っているサイコカOUNTERの数×1000ポイントダメージを受ける。

「俺は手札からサイコ・ワールドを召喚！」

《サイコ・ワールド》

効果モンスター

星4/地属性/サイキック族/攻1900/守1200 800
ライフポイントを払って発動する。自分フィールド上に表側表示で存在するサイキック族モンスター1体は、1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。この効果を発動するターンこのカードは攻撃する事ができない。三沢は心の中でそう呟くとあきらのデューエルを見守った

「三沢！約束した面白いのを見せてやるからちゃんと見てるよ！俺はレベル2クレボンスをレベル4サイコ・ワールドにチューニング！仲間の絆が、大地を駆ける騎士を呼びさます！シンクロ召喚！来い！大地の騎士ガイアナイト！」

《大地の騎士ガイアナイト》

シンクロモンスター

星6 / 地属性 / 戦士族 / 攻2600 / 守 800

チューナー + チューナー 以外のモンスター 1体以上

「なんだ！？あんな召喚の仕方聞いたことないぞ！」「なんだいまのインチキか！？」

とあきらのシンクロ召喚を見た観客席はかなりざわついていた

「詳しくは丸藤翔に聞け！」

とあきらはあらかじめシンクロ召喚についていろいろ教えておいた翔に説明を全て任せてた

「このためにシンクロ召喚を僕に教えたんすねえええー！」

と翔はシンクロ召喚について説明を求める人たちからもみくちやにされながら叫んでいた

「早く続きをしよう」

「もちろんだ！俺は大地の騎士ガイアナイトでワーウルフに攻撃！」

翔の叫びは華麗にスルーして二人はデュエルを続けた

大地の騎士ガイアナイト ATK2600 VS ジェネティク・

ワーウルフ ATK2000

「リバーズカードオープン！万能地雷グレイモヤ！」
遼太がカードを発動させると突然爆発が起こりガイアナイトは爆発に巻き込まれた

《万能地雷グレイモヤ》

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上に表側攻撃表示で存在する 攻撃力が一番高いモンスター1体を破壊する。

「俺はターンエンドだ」

あきら LP3200

フィールド魔法

脳開発研究所

- - - -

- - - -

手札二枚

「俺のターンドロロー！引いたカードはインセクトナイト！ドロローしたカードは通常モンスターだ！凡骨の意地の効果で追加ドロロー！」

《甲虫装甲騎士》

通常モンスター

星4/地属性/昆虫族/攻1900/守1500 昆虫戦士の中でも、エリート中のエリートのみが所属できるという「無死虫団」の精鋭騎士。 彼らの高い戦闘能力は無視できない。

「まだまだあ！引いたカードはフロストザウルス！追加ドロー！」

遼太お得意の凡骨の意地により遼太の手札は六枚にまで増えていた

「あとは効果は使用しない、俺は場のジエネティック・ワーウルフを生け贄に捧げてフロストザウルスを召喚！！」

フロストザウルス

通常モンスター

星6 / 水属性 / 恐竜族 / 攻2600 / 守1700 鈍い神経と感性のお陰で、氷づけになりつつも氷河期を乗り越える
脅威の生命力を持つ。寒さには滅法強いぞ。

「さらに手札から魔法カードスケープゴートを発動！そして手札の団結の力をフロストザウルスに装備させる」

《スケープゴート》

速攻魔法（制限カード） このカードを発動するターン、自分は召喚・反転召喚・特殊召喚する事はできない。自分フィールド上に「羊トークン」（獣族・地・星1・攻/守0）4体を守備表示で特殊召喚する。このトークンはアドバンス召喚のためにはリリースできない。

《団結の力》

装備魔法（準制限カード）自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体につき、装備モンスターの攻撃力・守備力は800ポイントアップする。

フロストザウルス

ATK2600+4000=6600

「フロストザウルスの攻撃力があきらのLPを上回った!？」

二人のデュエルを見ていた三沢は思わずそう言った

「これで終わりだ!フロストザウルスでダイレクトアタック!」

フロストザウルスがあきらに攻撃を仕掛けるがそれがあきらに届くことはなかった

「リバーズカードオープン!ガード・ブロック!ダメージを無くしてカードを一枚ドロー!」

《ガード・ブロック》

通常罫

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「そこなくちな!全力で来いあきら!ターンエンドだ!」

遼太LP4000

フィールド魔法

脳開発研究所あきら

羊トークン×4、フロストザウルス

- - -

凡骨の意地、団結の力

手札三枚

「俺のターンドロー！」（来た！）

あきらは自分が引いたカードを見てそう心の中で呟いた

「俺は手札からパンダボーグを召喚！」

《パンダボーグ》

効果モンスター 星4 / 水属性 / サイキック族 / 攻1700 / 守1400

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、800ライフポイントを払う事で自分のデッキからレベル4のサイキック族モンスター1体を特殊召喚する。

「脳開発研究所の効果で俺はあと一回サイキック族モンスターを召喚できる！代わりに脳開発研究所にサイコカウンターを置く必要があるけどな…、俺はパンダボーグを生け贄にマックス・テレポーターを召喚！」

脳開発研究所

サイコカウンター（0 1）

《マックス・テレポーター》効果モンスター

星6 / 光属性 / サイキック族 / 攻2100 / 守1200

このカードは特殊召喚できない。2000ライフポイントを払う事で、自分のデッキからレベル3のサイキック族モンスター2体を特殊召喚する事ができる。この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できない。

「マックス・テレポーターの効果を発動！ライフを2000支払ってデッキからレベル3のサイキック族を二体特殊召喚する！そして脳開発研究所の効果でライフを支払う代わりに脳開発研究所にサイコカウンターを置く」

脳開発研究所（1 2）

「レベル3チューナーサイコ・コマンダーを攻撃表示で、そしてメンタルプロテクターを守備表示で特殊召喚！」

《サイコ・コマンダー》

チューナー（効果モンスター）

星3 / 地属性 / サイキック族 / 攻1400 / 守 800

自分フィールド上に存在するサイキック族モンスターが戦闘を行う場合、そのダメージステップ時に100の倍数のライフポイントを払って 発動する事ができる（最大500まで）。このターンのエンドフェイズ時まで、戦闘を行う相手モンスター1体の 攻撃力・守備力は払った数値分ダウンする。

《メンタルプロテクター》効果モンスター

星3 / 光属性 / サイキック族 / 攻 0 / 守2200

このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に500ライフポイントを払う。この時に500ライフポイント払えない場合はこのカードを破壊する。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、サイキック族モンスター以外の攻撃力2000以下のモンスターは 攻撃宣言をする事ができない。

「なるほど、あのフィールド魔法でサイキック族のライフコストを補えるのか」

と三沢が解説をしてくれていた

「チューナーモンスター！またシンクロ召喚か！」

「その通り！」

あきらは遼太にそう返すと今回のデュエルで二回目のシンクロ召喚を行なった

「レベル6マックス・テレポーターにレベル3サイコ・コマンダーをチューニング！サイコの力が集いし時、最強のサイキックが姿を現す！シンクロ召喚！来い！ハイパーサイコガンナー！」

《ハイパーサイコガンナー》シンクロ・効果モンスター

星9/地属性/サイキック族/攻3000/守2500

チューナー+チューナー以外のサイキック族モンスター1体以上このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

また、このカードが守備表示モンスターを攻撃したダメージステップ終了時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ自分のライフポイントを回復する。

「ハイパーサイコガンナーは貫通効果を持つてる！しかも貫通効果で与えたダメージ自分分のライフを回復できるんだ！」

「トークンの守備力はゼロ……」

「その通り！ハイパーサイコガンナーでトークンに攻撃！」

ハイパーサイコガンナー ATK3000 VS 羊トークンDE

FO

遼太

LP4000 - 3000 = 1000

あきら

LP3200 + 3000 = 6200

さらに遼太の場のモンスターが減った事でフロストザウルスの攻撃力が下がった

フロストザウルス

ATK6600 - 800 = 5800

「凄い…一瞬にして二人のライフが5000以上離れたわ…」

自分の試験が終わりあきらの試験デュエルを見ていた明日香は二人のライフを見てそう呟いた

「しかしあのシンクロモンスターはフロストザウルスより攻撃力が低い…あきらはどうするつもりなんだ」

二人のデュエルを最初から見ていた三沢はそう言うとまた二人のデュエルに集中し始めた

「それがお前の本気があきら？」

「いいや、まだまだだよ、俺はカードを二枚伏せてターンエンド！」

あきらLP6200

フィールド魔法
脳開発研究所あきひ

- -
ハイパーサイコガンナー、メンタルプロテクター
- -
手札一枚

「俺のターンドロー！」

遼太は引いたカードを確認するが

(通常モンスターじゃないか…)

「俺は手札の古のルールを発動！コスモクイーンを特殊召喚する！」

遼太の場にモンスターが召喚された事によりフロストザウルスの攻撃力が変化した

フロストザウルス

ATK5800+8000=6600

(伏せカードを恐れちゃダメだ、俺は全力を出しきって勝つ！)

「フロストザウルスでハイパーサイコガンナーに攻撃！」

「攻撃宣言時にリバースカードオープン！バスター・モード！」

《バスター・モード》

通常罾

自分フィールド上に存在する シンクロモンスター1体を生け贄にして発動する。 生け贄にしたシンクロモンスターのカード名が含まれる「ノバスター」と名のついたモンスター1体を自分のデッキから攻撃表示で特殊召喚する。

「これが俺の切札だ！ハイパーサイコガンナーを生け贄にデッキからハイパーサイコガンナーノバスターを守備表示で特殊召喚する！」

《ハイパーサイコガンナーノ》効果モンスター

星11/地属性/サイキック族/攻3500/守3000

このカードは通常召喚できない。「バスター・モード」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。このカードが戦闘を行った場合、ダメージステップ終了時に相手モンスターの守備力分のダメージを相手ライフに与え、そのモンスターの攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復する。また、フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、自分の墓地に存在する「ハイパーサイコガンナー」1体を特殊召喚する事ができる。

(今回は壁にしてすまない…ハイパーサイコガンナーノバスター)

前の世界でいつも世話になっているハイパーサイコガンナーノバスターにあきらは心の中でそう謝った

「攻撃は続行だ！お前の切札は俺のフロストザウルスが打ち砕く！」

フロストザウルス ATK6600 VS ハイパーサイコガンナ

ーノバスター ATK3500

「ハイパーサイコガンナー/バスターが破壊された時、墓地からハイパーサイコガンナーを一体特殊召喚できる！」

「な…そんな強力な効果があったのか…ならコスモクイーンでメンタルプロテクターに攻撃だ！」

コスモクイーン ATK2800 VS メンタルプロテクター
DEF2200

「俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ」

遼太LP1000

フィールド魔法

脳開発研究所

フロストザウルス、コスモクイーン、羊トークン×3

- -

凡骨の意地、フロストザウルス団結の力

手札一枚

「俺のターンドロー！」

あきらは引いたカードを確認すると

「楽しかったぜ今回のデュエル」

「もう勝ったつもりか」

「ああ今回は勝ち貰った！」

「楽しかったぜ！また今度デュエルしような！」

「ああ、次は俺が勝つからな、覚悟してろよ」

「もちろんだ！」

遼太とあきは握手をしてデュエルの約束をしていた時
ちょうど十代のデュエルも終わろうとしていた

十代LP1000

- - -

- - -

万丈目LP1000

- - -

- - -

前線基地

「これでお互いライフは1000ポイントづつ！でもここで俺が攻撃力1000ポイント以上のモンスターを引いたら面白いよな？」

「何を戯言を！」

「でも引いたら面白いよな？俺のターンドロー！」

十代がドロウしたカードでデュエルの勝敗が決まる…

この状況にデュエル場の全員が十代達のデュエルに注目していた

(十代ならいける！頑張れ！)

あきらはその心の中で十代に声援を送ると再び十代のデュエルに注目した

「俺はこのカードフェザーマン(ATK1000)を召喚しプレイヤーにダイレクトアタック！」

「うわああああ！」

万丈目

LP1000 - 1000 = 0

「ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

十代が万丈目に勝った瞬間、会場中の生徒たちが十代の勝利を称えていた

「さすがにクロノス教諭に勝つただけはありますね」

アカデミアの校長である鮫島校長はクロノスにそう一言言うと、クロノスは「失礼スルー」と一言言って鮫島校長から逃げるように部屋を出ていった

「見せてもらいましたよ遊戯十代、そして神野あきら、君達のデッキへの信頼感、そしてモンスターとの熱い友情、そして何よりも勝負を捨てないデュエル魂！それはここにいる全ての者が認める事で

しよう、よって勝者遊戯君と神野君、ライイエローに昇格です」

その鮫島校長の言葉を聞いた三沢はあきらと十代に

「おめでとう二人とも、そしてようこそライイエローへ！」

「ああ！」

「これからよろしくな三沢！」

十代とあきはそれぞれ三沢と握手をすると「おめでとう！」「良かったなー！」と会場中から二人のライイエロー昇格を祝う声が上がった

「いやー疲れたなあ」

「いいからあきらも荷物を持ってくれ」

あのデュエルの後あきは三沢に手伝って貰ってイエロー寮への引っ越しの準備を進めていた

「ヤッホー！遊びに来たよ」

「遊びに来たなら帰れ」

「ジョークだよジョーク 差し入れにお菓子持ってきたんだけど食べる？」

「もちろん食べる！三沢も食べるか？」

「ああ頂こう」

（この調子じゃいつになったら終わることやら）

三沢はお菓子を食べながら人知れずため息をついていた

一方その頃

「あきら君はもう準備始めてるし…アニキももうライイエローに…」
翔がそう呟くと

「ういっす」

と十代が間の抜けた挨拶で部屋に入ってきた

「ってアニキ！どうしてここだ！」

「どうしてって？ここは俺の部屋だからさ」

と十代は自信満々にそう言った後

「俺はオシリスレッドを気に入っている！ここを離れる気なんてそうそう無いぜ！」

とまたもや自信満々にそう言った

こうして長かった試験がようやく終りを告げた

第五話 実技試験！（後書き）

まず最初に一言「すみませんでしたm(_____)m」

本当は2日前には投稿している予定だったんですが最近私情で忙しく更新できませんでした

更新待っていたかた（いるのか？）すみませんでしたm(_____)m

今回の主人公のデツキは私がリアルで一番好きなデツキ【ハイパーサイコガンナーノバスター軸】のサイキック族デツキです

しかしあまりガンナバーは活躍しませんでしたね…

まあそれは置いておいて、次回はPV20000突破記念の番外編「実技試験蜜柑編」です

次回もお楽しみに〜

番外編2 実技試験！蜜柑編（前書き）

閲覧ありがとうございますm(_____)m

今回万丈目の取り巻きBの使うデッキが分からなかったため
作者が実際に使っているあるデッキを彼に使わせています（笑）

番外編2 実技試験！蜜柑編

（あきら君頑張ってるなあ〜、あ！ガイアナイト出してる〜）

あきらのデュエルを観客席で見っていた蜜柑はあきらのデュエルを楽しく見ていた

「そろそろ蜜柑の番だよ、早く言った方がいいんじゃない」

「うん！じゃあ言ってくるね」

蜜柑は自分の順番が近い事を教えてくれた女子生徒にお礼を言うと、急いで自分の試験相手の元に向かった

「それでは山村晃彦、神宮寺蜜柑の両者とも準備はよろしいですか？」

「いつでもいい」

「大丈夫だよ」

二人がそう試験監督の先生に言うと

「それでは…デュエル開始いいい！」

と試験監督の先生がデュエル開始の宣言をした

「デュエル！」

「俺のターンドロー」

万丈目の取り巻きBこと晃彦は静かにそう言うとデッキからカードを引き抜いた

「俺は永続魔法六武衆の結束を発動！」

《六武衆の結束》

永続魔法 「六武衆」と名のついたモンスターが召喚・特殊召喚される度に、このカードに武士道カウンターを1個乗せる（最大2個まで）。このカードを墓地に送る事で、このカードに乗っている武士道カウンターの数だけ自分のデッキからカードをドロウする。

「さらに手札から六武衆・ザンジを攻撃表示で召喚！」

《六武衆・ザンジ》

効果モンスター

星4 / 光属性 / 戦士族 / 攻1800 / 守1300

自分フィールド上に「六武衆・ザンジ」以外の「六武衆」と名のついたモンスターが存在する限り、このカードが攻撃を行ったモンスターをダメージステップ終了時に破壊する。このカードが破壊さ

れる場合、代わりにこのカード以外の「六武衆」と名のついたモンスターを破壊する事ができる。

六武衆の結束

武士道カウンター（0 1）

「さらに手札から六武衆の師範を特殊召喚！」

《六武衆の師範》

効果モンスター

星5 / 地属性 / 戦士族 / 攻2100 / 守 800

自分フィールド上に「六武衆」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが相手のカードの効果によって破壊された時、自分の墓地に存在する「六武衆」と名のついたモンスター1体を手札に加える。「六武衆の師範」は自分フィールド上に1枚しか表側表示で存在できない。

六武衆の結束

武士道カウンター（1 2）

「俺は六武衆の結束の効果で六武衆の結束を墓地に送り、結束に乗っていた武士道カウンターの数だけカードをドローする、二枚ドロー！」

晃彦はあれだけモンスターを召喚したり魔法を使っていたのに手札の消費が少なかった

「手札から永続魔法連合軍を発動して、カードを一枚セット！ター

ンエンド！」

《連合軍》

永続魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する戦士族・魔法使い族モンスター1体につき、自分フィールド上の全ての戦士族モンスターの攻撃力は200ポイントアップする。

六武衆 - ザンジ

1800 + 400 = 2200

六武衆の師範

2100 + 400 = 2500

晃彦LP4000

フィールド魔法

無し

- -

六武衆 - ザンジ、六武衆の師範

- -

連合軍

手札三枚

「わたしのターンドロ」

蜜柑はデッキからカードを引き抜くと笑顔になり手札からカードを発動させた

「わたしは手札から手札断殺を発動するよ」

《手札断殺》

速攻魔法

お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドロウする。

「初手から手札交換系のカード使うなんて手札事故か？」

「手札事故じゃなくてわたしの作戦だよ」

蜜柑はVサインをしながら自信満々に晃彦に言った

(なんか調子くるっ…)

「それじゃあ手札断殺の効果で墓地に送られたリミッター・ブレイクの効果を発動！デッキからスピード・ウォリアーを特殊召喚するよ」

《リミッター・ブレイク》

通常罫

このカードが墓地へ送られた時、自分の手札・デッキ・墓地から「スピード・ウォリアー」1体を特殊召喚する。

《スピード・ウォリアー》

効果モンスター

星2 / 風属性 / 戦士族 / 攻 900 / 守 400

このカードの召喚に成功したターンのバトルフェイズ時のみ発動する事ができる。このカードの元々の攻撃力はバトルフェイズ終了

時まで倍になる。

「まだまだ行くよ、わたしは手札からジャンク・シンクロンを召喚してジャンク・シンクロンの効果を発動！墓地の二トロ・シンクロンを特殊召喚するよ」

《ジャンク・シンクロン》

チューナー（効果モンスター）

星3 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1300 / 守500

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

《二トロ・シンクロン》

チューナー（効果モンスター）

星2 / 炎属性 / 機械族 / 攻300 / 守100

このカードが「二トロ」と名のついたシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自分のデッキからカードを1枚ドロースする。

「そんな雑魚モンスター3体並べるのが作戦？レッドの奴らと絡んでから弱くなったようだな」

と晃彦はバカにしたように笑いながら蜜柑に言った

「わたしはともかくあきら君や十代君達をバカにするのは許さないよ！覚悟して！

レベル2スピード・ウォリアーにレベル3ジャンク・シンクロンを

チューニング！集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！おねがい！ジャンク・ウォリアー！」

《ジャンク・ウォリアー》

シンクロ・効果モンスター 星5/闇属性/戦士族/攻2300/守1300

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

「な…なんだその召喚方法！あのオシリスレッドが使ってた奴と一緒にじゃないか！」

「まだまだ終りじゃないよ！レベル5ジャンク・ウォリアーにレベル2ニトロ・シンクロンをチューニング！集いし思いがここに新たな力となる。光さす道となれ！シンクロ召喚！おねがい！ニトロ・ウォリアー！」

《ニトロ・ウォリアー》

シンクロ・効果モンスター

星7/炎属性/戦士族/攻2800/守1800

「ニトロ・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上自分のターンに自分が魔法カードを発動した場合、そのターンのダメージ計算時のみ1度だけこのカードの攻撃力は1000ポイントアップする。このカードの攻撃によって相手モンスターを破壊した場合、相手フィールド上に表側守備表示で存在するモンスター1体を攻撃表示にしてそのモンスターを続けて攻撃することができる。

「一ターンで二回シンクロ召喚だ！」

「まだまだ行くよ！」

手札から速攻魔法イージーチューニングを発動！ジャンク・シンクロンを墓地から除外してニトロ・ウォリアーの攻撃力をジャンク・シンクロンの攻撃力分、つまり1300ポイント上昇させるよ」

《イージーチューニング》

速攻魔法

自分の墓地に存在するチューナー1体をゲームから除外して発動する。自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力は、発動時にゲームから除外したチューナーの攻撃力分アップする。

ニトロ・ウォリアー

2800+1300=4100

「攻撃力が4000を超えただと…」

晃彦は蜜柑のモンスターの攻撃力に驚いていたがまだまだ蜜柑の猛攻は止まらなかった

「バトル！ニトロ・ウォリアーで六武衆の師範に攻撃！そしてニトロ・ウォリアーの攻撃宣言時にエネミーコントローラーを発動！六武衆・ザンジを守備表示に変更！」

《エネミーコントローラー》

速攻魔法

次の効果から1つを選択して発動する。

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の表示形式を変更する。

自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースして発動する。このターンのエンドフェイズ時まで、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体のコントロールを得る。
(なぜこのタイミングでエネミーコントローラーを使ったんだ?)

晃彦はそう疑問に思ったが口には出さなかった

「じゃあダメージ計算に移るね、二トロ・ウォリアーは自分のターンに自分が魔法カードを発動した時、そのターンに1度だけ二トロ・ウォリアーの攻撃力は1000ポイントアップできるんだ」
二トロ・ウォリアー
4100+1000=5100

「攻撃力5100!?!」

晃彦は二トロ・ウォリアーの攻撃力に驚き思わず声をあげていた

二トロ・ウォリアー ATK5100 VS ATK2500
六武衆の師範

晃彦

LP4000 - 2600 = 1400

「これで終わりだね、

二トロ・ウォリアーの効果発動!二トロ・ウォリアーが相手モンスターを戦闘で破壊した時、相手フィールド上に表側守備表示で存

在するモンスター1体を攻撃表示にして そのモンスターに続けて
攻撃する事ができるんだ」

「だからさっきエネミーコントローラーを使ったのか！」

「そういうこと あきら君達をバカにした罰を受けてもらうよ！六
武衆・ザンジを攻撃表示にして二トロ・ウォリアーで攻撃！ダイナ
マイト・インパクト！」

二トロ・ウォリアー ATK4100 VS ATK2000

六武衆・ザンジ

晃彦

LP1100 - 2100=0

「この俺がワンターンキルで負けたのか…」晃彦は自分のデュエルの腕に自信があったので蜜柑に負けた事にかなりショックを受けていた

「やったー あきら君と十代君のデュエルが終わる前に終わらせられた 早く見に行かなきゃ！」
一方蜜柑は早くあきらと十代のデュエルの続きを見るために観客席へと戻って行った

余談だが今のデュエルで蜜柑のファンクラブができたらしい…

番外編2 実技試験！蜜柑編（後書き）

今回はどうだったでしょうか？

今回の蜜柑のデッキは遊星風シンクロデッキ

晃彦のデッキは見ての通り六武衆デッキです

本当はワンターンキルさせるつもりはなかったんですが…

デュエルシーンを書くために実際にデュエルしてみたら

今回のデュエルと全く同じ感じでワンターンキルが決まっちゃった
んです（笑）

それでは次回も「それじゃあ次回もお楽しみに」

蜜柑にセリフ取られた…

第六話 デッキ泥棒！？奪われたあきらのデッキ（前書き）

久々の更新です、（、、（）ノ

それと今回はオリジナルのストーリーです

といってもよくある展開ですけど...

第六話 デッキ泥棒！？奪われたあきらのデッキ

試験から数日たったある日の事…

ライイエローに昇格したあきらは三沢の部屋に遊びに来ていた

「なあ三沢このカードとこのカードの組み合わせはどう思う？」

「それだったらこっちのカードがいいんじゃないか」

休みの日でもカードの事しか考えていないは三沢の部屋であきらの新デッキに入れるカードについて議論をしていた

PPPP！PPPP！

「あきら、君のPDAがなっているぞ」

「分かってる、えーと何々『今夜廃寮に肝試しに行かないか？』って十代からか！『行かない』って」

「行かないのか？」

「あそこは立ち入り禁止だから行くのめんどくさいんだよ、それより早く続きしようよ」

十代にメールを返したあきらは三沢と共にデッキ作成の続きを始めた

それからしばらく経ち新デッキが完成し終わったあきら達は二人でお茶を飲みながらゆっくりしていた

「疲れた…」

「ああ、確かに疲れたな…」

それにしても本当にあんなので良かったのか」

「なにが？」

「いや、あのモンスターじゃなくても他に…」

「おい！あきらはいるか！？」

「どうした遼太？」

三沢の話を遮って部屋に入ってきたのは試験の後からあきらと仲良くなっていた遼太だった

「せめてノックぐらいはしてから入ってくれ」

「ああ悪い…ってそれどころじゃないぞ！」

「そういえば俺を呼んでたよね、何かあったの？」「ああ、実は今デュエル場にあきらが最初の俺とのデュエルで使っていたデッキを使っている奴がいてな、もしかしたら最近うわさのデッキ泥棒かも知れないと思って確認に来たんだ」

「あきら…念のために聞くぞ部屋の鍵はしていたか？」

遼太の話しを聞いた三沢はそうあきらに聞いた

「かけ忘れてた…」

「はあ…」

あきらの言葉に三沢とあきはため息をついていた

「なにかデッキはあるかあきら？」

「一応持つてる！早くデュエル場に行こう！」

あきらがそう言うと三人は急いでデュエル場に向かった

「エクセリオンでダイレクトアタックだ！」あきら達がデュエル場に行くにあきらのデッキを使いデュエルをしているオベリススクブルの生徒がいた

「いた！さっき俺が言ったのはあいつだ！」

遼太がそう言うと三人はその生徒の元へと向かった

「あきら君のデッキを返してもらおうか」

「そのデッキはあいつの物だ早く返してもらっせ」

「な…なんでライイエロートップの三沢大地と遼太と一緒にここに
いるんだ!？」

「げっ! あきらもいやがる」

「

「いいから早く返してやれよ」

遼太がそう少年に言つと

「ふん! これはもう俺のデッキだ!」

そう少年が言った時、デュエル場に来てから

今まで全然喋らなかつたあきらが少年に一言言った

「おい、デュエルしろよ」

(一度でいいから言ってみたかつたんだよなこの台詞…)

「お前にデュエルするデッキはあるのか?」

あきらのデッキを持つ少年はバカにしたようにあきらにいった

(部屋にあったデッキは全部俺が持つてる、10もデッキを盗つた
んだもつあるわけが)

「デッキはある、お互いが所持するデッキ全てをかけたアンティル
ールでデュエルだ」

(まだデッキあるの!?)

「ふん!その言葉後悔するなよ!」

「デュエル!」

あきらと少年は同時にそう叫ぶと腕に装着させたデュエルディスクを起動させた

「俺のターンだ!ドロー!」

あきらはそう言うとか一杯ディスクからカードを引くと一体のモンスターを召喚した

「俺は手札のマンジユ・ゴッドを召喚!」

《マンジユ・ゴッド》

効果モンスター

星4/光属性/天使族/攻1400/守1000

このカードが召喚・反転召喚された時、自分のデッキから儀式モンスターカードまたは儀式魔法カード1枚を選択して手札に加える事ができる。

「俺は高等儀式術を手札に加える」

《高等儀式術》

儀式魔法(制限カード)

手札の儀式モンスター1体を選択し、そのカードとレベルの合計が

同じになるように自分のデッキから通常モンスターを選択して墓地に送る。 選択した儀式モンスター1体を特殊召喚する。

「おれはモンスターを一体セット、さらにリバースカードを三枚セットしてターンエンド」

あきらLP4000

フィールド魔法

なし

- -

- -

手札二枚

あきらがターンを終えたのを確認すると少年はデッキからカードを引いた

「俺のターン、ドロー」

少年は引いたカードを確認するとニヤリと笑みを浮かべた

「さっそくキーカードが来たぜ、自分のカードにやられちまいな！俺はカオスエンドマスターを召喚し伏せモンスターに攻撃する！」

少年が攻撃の宣言をするとカオスエンドマスターはあきらに対し攻撃の姿勢になった

「させないよ、リバースカードオープン！聖なるバリア・ミラーフォースー！」カオスエンドマスターの攻撃は全て弾き返されカオスエンドマスターに帰ってこようとしていた

「甘いな！リバーカードオープン！我が身を盾に！」

《我が身を盾に》

速攻魔法

1500ライフポイントを払って発動する。相手が発動した「フィールド上のモンスターを破壊する効果」を持つ。カードの発動を無効にし破壊する。

跳ね返されたカオスエンドマスターの攻撃を切り込み隊長が受け止めカオスエンドマスターは無傷のまま攻撃を再開した

カオスエンドマスター

攻撃力1500 VS 守備力2000 ガード・オブ・フレムベル

少年LP4000 - 5000 = 3500

《ガード・オブ・フレムベル》チューナー（通常モンスター）

星1 / 炎属性 / ドラゴン族 / 攻 100 / 守 2000

炎を自在に操る事ができる、フレムベルの護衛戦士。灼熱のバリアを作り出して敵の攻撃を跳ね返す。

「ちっ、ガードが固いな…俺はカードを二枚セットしてターンエンドだ」

少年は不機嫌そうにそう言うとターンを終了させた

少年LP3500

フィールド魔法

なし

-
-
-

手札二枚

「俺のターンドロー！」

あきらは引いたカードを確認すると一瞬笑顔になるがすぐに真剣な表情になり一枚のカードを発動させた

「俺は手札の高等儀式術を発動！デッキからフロストザウルスを墓地に送り…」

「レベル六？何を出すつもりなんだ」

あきらが墓地に送ったモンスターを見た遼太はそう呟くと

「見れば分かるさ」

と若干疲れた様子で三沢が言った

「俺は手札からハングリーバーガーを儀式召喚！」

「「「ええー！？」」」

「ん？なんかしたの？」

あきらの出したモンスターにデュエル場でデュエルを見ていた全員が驚いていた

「もつといい儀式モンスターいるだろ！？」

「なんだと！？バカにするなよ！ハングリーバーガーはカッコイイ

んだ！」

あきらは対戦相手の少年に対し迷う事なそう答えた

「はあ…なんか疲れる」

少年は思わずそう呟いていた

「じゃあ続きやるよ、俺はレベル1ガード・オブフ렘ベルにレベル6ハングリーバーガーをチューニング！聖なる守護の光、今交わりて永久の命となる。シンクロ召喚！降誕せよ、エンシエント・フェアリー・ドラゴン！」

《エンシエント・フェアリー・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター 星7 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻2100 / 守3000 チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上1ターンに1度、手札からレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する事ができる。この効果を発動するターン、自分はバトルフェイズを行う事ができない。また、1ターンに1度、フィールド魔法カードを破壊する事ができる。破壊した場合は1000ライフポイント回復する。さらに、自分のデッキからフィールド魔法カード1枚を手札に加える事ができる。

「初めて見るシンクロモンスターだ…」

あきらの場に現れたドラゴンを見た三沢はそう呟くあきらが勝てる様に願いながらデュエルの続きに注目した

「人の作ったデッキじゃあ勝てないよ、自分で試行錯誤して組み立

てたデッキとの信頼があるから勝てるんだ！
お前とそのデッキにはそれが無いから勝てない！それを証明してやる」

「やれるもんならな！」

ハングリーバーガーが出てやつとデュエルに燃えてきたあきは少年にそう言つと一枚のカードを発動させた

「俺は手札のミラクルシンクロフュージョンを発動！墓地のハングリーバーガーとエンシエント・フェアリー・ドラゴンを除外して波動竜騎士ドラゴエクイテスを融合召喚！」

「に…二枚目だと…」

あきらの部屋から盗んだ一枚しかドラゴエクイテスが無いと思つていた少年はあきらがドラゴエクイテスをだした事に驚愕した

「まだまだあ！闇次元の解放を発動！舞い戻れ！食品の神！ハングリーバーガー！」

「最初と喋り方変わってるぞ！」

《闇次元の解放》

永続罫

ゲームから除外されている自分の闇属性モンスター1体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する。このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊してゲームから除外する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

相手が激流葬や奈落の落とし穴を出してこなかったのであきらは上機嫌で、周りの人が引いてしまいそうなテンションでハングリーバーガーを復活させた

「まだまだ行くぜ！正当なる血統を発動！蘇れフロストザウルス！」

《正当なる血統》

永続罫

自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターがフィールド上に存在しなくなった時、このカードを破壊する。

「なんて展開力なんだ…」

「これで終わりだ！ドラゴエクイテスでカオスエンドマスターに攻撃！」

「くっ…収縮を発動する…」

波動竜騎士ドラゴエクイテス 攻撃力3200 ÷2 = 1600 V

S 攻撃力1500 カオスエンドマスター

少年LP 3500 - 1000 = 3400

「フロストザウルスで攻撃！」

少年LP 3500 - 2600 = 900

「ハングリーバーガーで止めだ！」

「ちくしょう…俺はただ強くなりたかっただけなんだ…だから皆のデッキを盗ん「それじゃあデッキは遼太に渡しておいてね俺は寝るから」俺の話し聞けよ！」

「ええ〜いいよ聞かなくて、あ！そつえば名前聞いてなかったね」

「そつえばそつだ、俺の名前は「まあ興味ないからいいけど」なんでだよ！」

新しいデッキを試す事もできたし盗られたデッキも帰ってくるので正直帰りたかったあきらだったが

(やばい…こいついじりの楽しい)

そつ思いながらもやっぱり帰って早く眠りたかったあきらは後ろでうるさい少年を無視して自分の部屋に戻った

第六話 デッキ泥棒！？奪われたあきらのデッキ（後書き）

読者の皆さんすみませんでしたm(_____)m

最近バイトを始めたので上手く時間が作れずに長い間投稿できま
せんでした…

これからも時間を作っては投稿するので楽しみにしてくださいね、
(´・`・´)

さて今回のあきらのデッキは

「融合とシンクロと儀式詰め込んでみました」デッキです

今回はバニラ軸で回してましたが実際回す時は闇属性を軸にして回
した方がいいと思います

ちなみに儀式モンスターはお好みで何でもOKです

何故にハングリーバーガー？と思った方いらっしやるとは思います
が理由をハッキリ言っとわたしの趣味です（笑）

その時の気分で私は変えています

さてそれではこの辺で失礼します

次回もお楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0465m/>

平凡な男の決闘物語

2010年10月30日20時41分発行